

多度津の西、二里の所にある彌谷山の半腹に位する梵刹にして、僧行基の開基したるところである。境内は、岩石を切開きて造りしものなれば、突兀たる斷岩は、稚松を生じて、奇岩の名を擅にしてゐる。頂上に上れば、眼界快濶、坐して八國の峰巒を望むことを得べく、八國寺と號したることあるは、實に宜なるかなと言いたる。

(多度津へ十九哩)

○善通寺

善通寺驛の東方十町にある古刹にして、僧空海、唐より歸朝後、父善通の名を取りて、自ら建立したる此の寺に命じた。其の頃は、此の邊一帶に碧波の漲りしが、年所を経ると久しく、終に現時のごとく、海岸を距ることの遠きに至つた。故にむかし此の邊を總稱して、屏風が浦と稱へたとのことである。境内頗る廣濶、殿堂壯麗を極め、本堂は、巍々として天空に聳え、仰いで佛徳の高きを感じしむるに足る。附近に比類なき巨刹である。

千年のむかしを今に法の道。

何人の句か寡聞で知らぬが、其所に刻んである。

(高松より二十四哩)

○金刀比羅神社

金刀比羅神社は、往時象頭山金毘羅大權現と稱へて、眞言宗にして、金光院松尾寺と號した。明治の初、神佛混淆を禁じて、分離せしめ

善通寺 金刀比羅神社



られてから、金刀比羅神社と改稱し、金毘羅大権現なるものは、松尾寺に私祭として保存してある。然れども、今の金刀比羅神社は、其の祭神大己貴命なるが、古の所謂金毘羅大権現は、果して今の大己貴命と同體なりや、否や、今の神社に賽するもの、年々數十萬人、是等の人は、昔の大権現として拜し居るや、否や、大己貴命として、崇敬し居るや、是等が即ち信仰に對する研究で、賽客の口唱することゝるを聞くに、いづれも南無象頭山金毘羅大権現と聲高らかに拜んで居る。されば、謂は、御門違の參拜で、大己貴命こそ實に勿體なくも、疎外せられて居ることゝなる。世に此のくらの奇怪なるものはなからう。これに就いて説があるが、議論が、横道に入

るから、黙して置かう。停車場から琴平町を縦斷して、前面を見れば、神社は、象頭山の半腹にあり、數百の石階を登れば、本社に達する。此の町は、多くは旅舎と土産物とを販ぐ家、軒をならべて、客を呼んで居る。虎屋、備前屋のごときは、最大なる逆旅にして、普通の入口の外に、宏大なる門構の玄關附の入口もある。門前には、何々の宮様御旅館と、筆太に嚴めしく書いた看板を掲げて、名譽を誇つて居るが、これと相並んで、娼妓貸座敷の看板もかゝつて居る。言語同斷といはうか、滑稽と言はうか、實に奇異の感に打たれる。今一つ此の他の旅舎の特色といつては、先づ差當り、外に類がないから、姑く特色として置かうが、旅舎の下婢は、木綿の着物をまと



ふて、特に醜婦のみを撰り抜いて、給仕せしめられることである。いかに醜婦としても、此んなによくも有つたものだと思はれる。何故かと探つて見ると、旅舎は、多くは娼妓貸座敷を兼ねて業として居るので、泊つた客に娼妓を買はせるやうに、醜婦の下婢を召使ふのだとの事である。此處の娼妓は、枕席を侍するのみではない。三絃をも弾くから、所謂二枚鑑札である。琴平に宿泊する旅客よ、清淨無塔の心を以てせば、庶幾くは過失なからう呵々、誰やらの句に、

生菩薩象頭山下に徘徊し

生血を吸ふて暮しけるかな

面白いことを言つたものである。

(高松より二十七哩)

○琴弾の濱

琴弾の濱とは、名からやさしいが、有明の濱ともいふ。讃岐三豊郡観音寺町の海濱で、多度津から七八里もあらず。前は内海に臨んで、後は、松樹の鬱葱たる琴弾山を負ひ、遙に山陽の峰巒を望み、風景絶佳の勝區である。惜いかな、交通の機關に乏しいので、行きて探るものが少ない。

松風におとなふ聲のかなたには、

なぎさなきこゆ琴弾の濱。

○小松島

阿波徳島より南方二里の所にある。陸に接して、砂洲はるかに海面

琴弾の濱 小松島



を挑み、陸をはなれて、小島波間に出没し、穩波灣を涵し、風光明媚のところは、即ち此處であらう。此の邊の風光は、規模の小さいと、奥の松島に比することが出来る。和田の崎、和田の松原、兜島の辨財天、鳥帽子岩、横津の松原、駒つなぎ松、千代の松原など、古來最も著名にして、小松島の稱も、誣言ではない。

坐ながらに松島を見るうれしさよ

路銀も入らずくたぶれもせず

徳島へ渡らんには、大阪よりすべく、また和歌山よりするも可である。

○鳴戸

阿波の撫養の港の前に大毛山ありて、周回五里、其の西四五町に高島ありて、周回三里、其の北四五町に島田山ありて、周回三里二十五町、此の三島は、鼎立して相對ひ、大毛山の北端孫崎と、淡路の鳴戸崎と相對して、僅に十五町を隔て、居る。此の間を鳴門の瀬戸といふのである。潮流急激にして奔流し、萬雷の轟くがごとく、時としては直徑二十餘間の大渦流をなしつゝ、數里の間に奔流することがある。其の物凄きこと、喩ふるに物がない。三千風文集に云ふ『霜月十二日の空も乾きぬ。いざや、鳴戸に耳よせてんと、案内のもの一人を具して、一里半の峰路、羊腸を廻り、二十餘町の岬をたどり、十丈ばかりも聳ちたる岩の肩より打上り、乾搗知布うち敷き、



鳴戸の早瀬を宛踵の下に見る。向ひは阿州撫養の崎、手と行く程なるぞや、漸々潮時になればや、山海いづこともなく、轟々と鳴る音のきこゆ。すはや、西の海原、見るく七尺程脹れあがる。實にや、山陽西海の潮息、只十八町の咽にせまり震ひ、喘息さる音あれば、おびたゞしきもことわりなり。此の中程に、二丈ばかりの岩島あり。一寸のひまに、此の岩頭をみなぎり、逆巻き打ち越す浪に底の渦、ひいき合ひて、千輪の雷車を一響に物するや、肝魁も消えんばかりなり。水焔朶山を劈けば、波嵐輪寶の勢、殺那に、龍門千尺の瀑布、逆天に流れ、那智三百尋の飛端、銀漢に落合ふかと、灘谷の巴、左右に流れ、淵穴の深さは、金輪も見えぬべし。追ひく次第く、

流れかはり、もみあひ、もみあひ、且つ顯れ、且つふさがり。今の名残の畦々は、千尋二十摸の白龍、乙をあふる氣色に、金翅鳥も、こゝにや餐るならん。遙に湧きかゝる波頭は、鯉魚、鰭を見ざる、適、大鵬の翁も、こゝに扈言の釣を投げよかし。かゝれば、此の隣濱の漁夫は、いと小さき釣艦に、起つ浪とはじり除け舳筵を翼にて、たゞ、鷗、蘘の鱖を追ひまはすがごとく、見え隠れゆき違ふさまは、花の錦の鴛棧、雲の衣の、電杼よりもなほ速かなり。誠に彼等が身には、浪風も、怒るらん。渡りくらべし世のそゞぎ、何となるとのうたかたの、あはれなりし形勢なり。かくて、潮の上、四尺ばかりに低うなりければ、右の紅阿に待ちはづみたる商船づく



み艫まわりたるが、我われ劣おとらじと、舳へいかりひ碇ひ引きあげ、艫ぶらふりまはし、槳かぢつ柄かにぎると見みえしが、こゝを大だい事に氣きをのみはや海原うなばらの燈こさかに落おちしかくれば、彈だん堵しの中に、二十四里りの目路もくろ、一航かうにゆく。鶯うぐひすかあらぬか、車渠ほたこがいのあゝ日本にほん一の見物みものやと、あまりに盱めばり、心こゝろ悖せきつき、氣きつかれて、宿やどり寺でらの假窓かりまどに机つくろして、鳴戸なるとの眺望てうぼうに、當寺たうじの艷景えんけい、福良ふくらの人にん境きやう、二丈一卷ちやうくわんにつり、梵庫ぼんこにこめて、歸かへりし』云々うんぬんとあり。いかに悽愴せいさうの狀さまなりしかは、之これにて知しられるであらう。賴山陽らいさんやうの詩しに、

天風吹蹙週瀾緊。鯨呿鼈擲誰正視。君家鳴門去咫尺。  
 双眼到處難爲水。鳴水孳溪不容刀。拗堂覆杯置杯膠。  
 胸吞雲夢無芥帶。知君對此從哂嘲。嗟吾南海未果涉。

變望海雲碧疊々。何時訪君傾金尊。醉把盤渦當咲曆。

撫養むやは、徳島市とくしましの南みなみ、四里十三町しやうとうの所ところにある。

○大瀧山

大瀧山おほたきやまは、徳島名勝とくしまめいしやうの一いっに數かずへられる所ところで、二條でうの磴道とうだうを備そなへて居ゐる。左方さほうは、春日神社かすがじんじやの後方こうほうよりするもの、右方うほうは、薬師堂やくしだうの側そばより登のぼることが出来る。春日神社かすがじんじやと薬師堂やくしだうとは、東西相隣とうさいあひとなり、其その山さん上じやうには、高塔かうたふがある。春陽しゆんやう駘蕩たいたうの候こうに至いたれば、遊いう客かく群集ぐんしふして、花はなを賞しやうし、興きやうを催もよほして居ゐる。尙なほ山頂さんちやうに登のぼるときは、眺てうしやう鵬はは、一層そうを加くはへる。

○日の峯



小松島の海岸に位する小丘にして、頗る峻嶮である。攀登すること、甚だ困難であるが、萬苦を嘗めて、山頂に登るときは、四壁絶壁にして、眺望に富んで居る。眼下には餘戸の浦の烏帽子岩、兜島の辨天祠等の勝景は、一眸の中に收まる。餘戸の浦は、九郎判官義經が、屋島を攻むるとき、上陸したる舊址である。

餘戸浦さゝふみよする烏帽子岩、

形たゞして何思ふらん。

○星が岡

伊豫松山の南方なる平野に屈起したる孤丘の名である。天山と相對して居る。元弘三年、土居通治、得能通言が相謀りて、勤王の兵を

擧げて、長門探題、北條時直の軍を破つた舊蹟である。其の事を勅して一の碑を建て、題して星岡表忠之碑と稱へ、伏見宮貞愛親王の御染筆である。丘上の眺望は、頗る開豁である。松山に至らんに、宇品より伊豫三津が濱に渡り、これより鐵路、直ちに松山に達する。

○道後

道後温泉は、古にあつては、伊豫の湯と稱へて著名の温泉である。泉質は、半透明にして無臭無味、温度は、湧出口に従つて、異なるが、一の湯は、華氏の百十度、二の湯以下は、七八度づゝ下降して居る。浴室は、二の湯、二の湯、三の湯、四の湯、五の湯及



び新湯の六つで、第一より第三までは、一屋内に、第四第五又一屋内にある。屋は一の湯の末流を受くることゝなつて居る。浴槽は、いづれも花崗石にて造り、其の上に二層三層の樓を設け、甚だ華麗である。一年の浴客七十萬乃至八十萬に及ぶといふ。如何に其の盛大なるかが推測られる。高濱よりは汽車僅に二十分内外で達する。

○伊佐爾波神社

道後なる湯月谷、御假屋山に鎮座まします縣社にして、比賣大神を本殿に、應神天皇を中殿に、仲衷天皇を左殿に、神功皇后を左殿に奉祠してある。寛文七年、松山の領主久松宣長の再興したるところにして、石清水八幡宮を摸して構造したるものである。御假屋山の

半腹になりて、麓より百數十階の石燈を上つて、詣るのである。遙に眸を放てば、北には燧灘を望み、南には、石土山の山脈、破浪のごとくに綿足し、松山の市街は、脚下にありて、甍を並べたるが、誠に麗しい。其の附近には、湯月城址、石手寺、兩新田靈社など、一顧の價值あるものが、少なくなない。

○十六日櫻

松山市の北、御幸村なる大字山越の龍穩寺境内にある櫻樹にして、陰曆正月十六日には、花唇を破つて、笑ふので、此の名がある。故に之れを車返しの櫻とも云ふ。是は、舒明天皇、これを御覽せられやうとして、御幸したまふたが、花は、未だ咲かぬによつて、還幸



四國地方

一九二

あらせられやうとした時、開花したので、御車を返させたまふたといふので、此の名を得たのである。されど、是等の傳説は信ずるに足らぬ。

爲村卿の歌に、

はつ春のはつ花さくらめづらしく、

都のうめのさかりにぞ見る。

七 九州地方

○門司

門司は、内地より渡航するには、九州の關門である。長門の下の關

と一葦帶水、呼べば將に答へんとするの近距離にある。其の間は、即ち馬關海峡で、潮流の激しきところである。此の地は、特別輸出港にして、九州鐵道の起點なるを以て、陸には、百貨常に輻湊し、海には、大船巨舶の出入、甚だ頻繁にして、大阪から海路二百九十二海里ある。此から吞吐せらるゝ貨物、殊に石炭のごときは、蓋し莫大の額に上るのである。

○清瀧公園

門司市の南五六町の山腹を以て、これに充てられてある。園内には、亭榭數棟を設け、遊人休憩の便に充てゝある。こゝより觀望すれば、北は、海峡を隔てゝ、近く馬關の市街を望み、西は、注洋たる玄海

門司 清瀧公園

一九三



灘にして、陸岸に近く無数の群島、蒼布羅列し、九州西部の沿岸も防護して居るかと思はれる。東は、周防灘の風光指呼の間にありて、其の景色の絶勝は、稀に見るところである。

○速戸神社

門司港の東北に隣れる速戸崎なる馬關海峡に瀕せるところに鎮座ましくしてある。西北は、長門の壇の浦に對し、其の間は僅に十町を出でない。海峡中、最も狭きところであらう。潮流矢よりも早く、舟行の危険とするところは、此の邊である。此の地の海濱に、奇岩の隠見するありて、多く波間を彩り、碧流に洗はれて、其の狀の奇なるもの、中々に多い。

○耶馬溪

豊後の勝地で、頼山陽によりて、大いに世に喧傳せらるゝに至つた。中津より下車して、二里ばかりにして達する。山國川に沿ひたる一帶の地にして、古は、山國溪と稱へられたが、山陽一たび此の勝を探りてより、絶世の才筆を振ひて、大にこれを賞揚し、其の詩文中に耶馬の文字を用ひたるより、終に耶馬溪と稱するに至つた。溪の長さ十五里、支溪を合するときは、百里にも達するといふ。最も秀麗なるは競秀峰にして、所謂青生洞門である。其の山上に羅漢寺のある故、青生羅漢とも云ふ。奇岩怪石、重疊累出し、層巒は、これに凭れるものゝごとく、幽邃閑雅、實に仙境に入つた感が起る。



賴山陽の詩、

峰容面々懿看殊。耶馬溪山天下無。安得彩毫如董巨。

生縑一丈作橫圖。

梁川星巖の吟に、

石約峰頭山東溪。煙雲錯々樹低迷。畫人要闖黃家秘。

何不齋糧到鎮西。

耶馬溪の勝の最も絶殊したるは、羅漢寺曾木橋より屈知林に至るの間にして、新羅漢寺は、競秀峰にあつて、青生洞門より十八九町。大化元年、法道仙人の開きたるところ、斷崖絶壁、洞窟あり、飛瀑あり、天然の石橋などがある。寺は、懸崖にありて、堂宇巍然、風

光奇絶、其の内には、釋迦、文珠、普賢、五百羅漢の石像を安置してある。前面の溪流に一橋を架す。これは曾木橋と稱へて居る。其の對岸に聳立するものは舊羅漢寺にして、其の山腰に一の大洞がある。自から門をなしてゐる。更に上りて、柿坂に至れば、對岸に山陽の筆捨岩がある。その他、溪中の奇勝は、枚舉に遑がない。

(門司より中津へ三十九哩)

○宇佐八幡宮

宇佐驛の東南二里十町にありて、龜山に鎮座せしまし、應神天皇、神功皇后、比賣大神を祀つてある。境内は、老樹蒼鬱として、一たび足を入るときは、心氣清澄、自から神威の高さに敬虔の念を起



さしめる。和氣清麻呂が、神勅を請ひ奉つたのは、此の神社にして、  
夙に史上に名高い。(門司より宇佐驛へ五十四哩)

○香推宮

香推驛より東三四町、神功皇后を奉祀したる官幣大社である。本社  
は、日本四宗廟の一に屬し、歴代朝廷の崇敬淺からぬことは、夙に  
史上に著はれてある。且つ此の社域は、皇后三韓征伐のときの行宮  
の地、又凱旋のとき、鳳輦を駭めさせたまへる由緒ある地である。  
社地廣潤、四圍には、老樹鬱葱として、深緑四時絶ゆるときなく、  
景趣は、自から幽邃である。境外は、直ちに海濱にして、眺望の開  
豁なる繪の如くである。

千早ふる香推の宮のあや杉は、

神のみそぎに立てるなりけり。

是は、新古今集に載するところなるが、香推の宮の綾杉とて、夙に  
其の名の著はれたるものがある。即ち本社瑞籬の前にある。昔、神  
功皇后、征韓の後、兵器を此に埋めしめ給ひ、其の御標として、手  
づから杉の苗を植ゑたまふたが、其の老幹は、既に枯死せるも、子  
葉は、今に至るまで静々として發育して居る。  
又停車場より二十餘町の海濱に、神功皇后、征韓の役に用ひたまひ  
し船の化石したるものなりとて、名島といへる所にある。

(門司より四十二哩)



○管崎宮

箱崎驛の西北二町餘の處にある。應神天皇、神功皇后、及び玉依媛命を祀つてある。歴代朝廷の崇敬あらせられしところにして、官幣中社である。其の樓門に掲げたりし敵國降伏の四大字は、畏おほくも、延喜の帝の震筆である。殊に其の樓門のごときは、すべて組立つて造つたものにして、一本の釘をも用ひて居ない。其の建築の奇巧に驚かぬものはない。社前にある標の松といへるは、神功皇后、應神天皇を産みたまふたとき、御胞衣を箱に納め、これを埋めさせたまふた處へ、標として栽ゑさせたまひし松なるが、文永二年二月十一日、本社炎上るとき、其の松も類焼したりしが、其の焼跡の灰

の中より、松の芽生して、漸次成長し、終に今日のごとくなつたとのことである。其の一の鳥居は、北方の海濱に矗立して、大道は、樓門に導いて居る。頼山陽の詩に、

廟門岌嶮面長瀾。仰視彫題照碧灣。長倚神威伏戎狄。

新羅高麗指揮間。

境内は、停車場に隣接して居るから、參拜には、極めて便利である。

(門司より四十五哩)

○博多東公園

箱崎驛より西南六町にある千代の松原の一部を公園となしたるもの

管崎の宮 博多東公園



にして、七萬五千餘坪の面積を有し、翠松白砂の上に蜿蜒たるもの、聳立するもの、蟠屈するもの、互に枝を交へて、相連なり、潮水岸を洗ふて、幽静閑謔、海上の眺望は、頗る絶佳と云ふべきである。園内には多数の茶店、割烹店がある。園の東方なる松林中には、招魂社、北には、元冠記念碑がある。其の前に龜山天皇の御銅像が、衣冠束帯の雄姿を臺石の上に立たせたまふて、威容儼然、永に帝國を守護して、下萬民が安かれと祈らせたまふて居らるゝやうに見える。其の傍に僧侶が一卷の經卷を左手に握つて、胸の邊に見せ、右手には、念珠を提げて、立つて居る銅像がある。其の容貌の魁偉にして、威高の犯すべからざるがごときものは、日蓮上人のそれである。

ある。これは元冠討伐と其の防禦の由緒あるによりて、建てられたのである。

此に至らんには、福岡市より徒歩するも可く、又、箱崎驛にて下車するも、不可ではない。箱崎驛よりは、僅に西南六町の所にある。

○福岡西公園

福岡市の西部にある。東公園に對して、此の名を附したのであらう。波浪、岸を洗ふて、網を曳くことも出来れば、綸を垂るゝことも出来る。博多灣の風光は、一眸の中に集つて、一幅の畫圖を開いたやうに見える。後方は、福岡市街を隔て、肥筑の山岳重疊たるを望まると、園内には、數百株の櫻樹ありて、花時の眺は、得も言は



れぬ。

○太宰府神社

太宰府神社は、太宰府の天満宮と稱へ、寶満山の西麓にありて、むかしの太宰府の舊址である。官幣中社にして菅原道真を祭つてある。延嘉五年八月の創建にして、社殿は、金銀を鏤めず、丹碧を用ひず。白木造りの極めて素樸なるものにして、高傑なるところ、神さびたる趣の存して、自から神威の高きを感じ、知らず／＼襟を正さしめる。社前には、有名なる飛梅あり、境内には、多くの攝社、末社があつて、額殿には、無数の扁額を奉納して掲げられてある。元人薩都刺の詩に、

文行紀代現

無常説法現神通。千里飛梅一夜松。萬事夢醒雲吐月。

觀音寺裡數聲鐘。

とある。此に至らんには、二日市(門司より五十六哩)に下車せば、それから二十餘町で達する。

○寶満山

太宰府神社の後方に聳立する一の高峯にして、南は、冷水嶺に連り、岩屋山、天拜山は、其の左右に聳え、風光は、極めて絶佳である。山中には、櫻、楓、躑躅の多ければ、花時こゝに登るものは、中々に多い。

○天拜山

太宰府神社 寶満山 天拜山

文行紀代現



九州地方

二〇六

二日市驛ふつかいちえきから三十餘町よちやうにて達する。武藏温泉むさしんせんの西南せいなんに位して、一に天判山てんぱんざんとも云ふ。山頂さんちやうに小祠せうしありて、菅原道真すがはらみちざねを祀まつつてある。傳つたふるところに依よれば、菅公くわんこう嘗かつて此この山やまに上のぼり、冤えんを天てんに訴うったへたるところである。山中さんちゆうに小瀑せうばくがある。傍かたはらに一の巨岩きよがんありて、衣懸石きねかけいしと云ふ。碑ひありて、大僧都だいそうづ信聰しんそうの詩しを刻こくしてある。即すなはち、

天判峰頭仰彼蒼。願心成滿放威光。御衣薰石變成塔。  
五百年來流水香。

とある。  
(門司より五十六哩)

○都府樓の舊址

都府樓とふらうの舊址きゆうし 太宰府舊址たさいふきゆうし即ち太宰府天滿宮たさいふてんまんぐうの北方ほくほうに位すれば、二日市驛ふつかいちえきよりする

が可よい。此この樓らうは、天智天皇御宇てんちてんわうぎよの創建さうけんにして、二州二島しゅうとう(壹岐、對島)の政務せいむを執行しつかうし、併あせて對外たいがいの警備けいびを司章ししやうしたるものにて、其の大政廠だいせいしやうの趾あとである。今は、唯たゞ、斷礎敗瓦たんそはいがわ、徒いたづらに當年たうねんを憶しのばしむるのみである。廣瀨淡莊ひろせたんさうの詩しに、

躊躇吊古入保養。哀草迷離戰野風。雲表曾宗樓々々。  
劫碌渾府青嵐々。苔對舊瓦鴛翔碧。雨灑殘花鶯淚紅。  
落日煙鐘何處寺。千年往事一聲中。

こゝに行くには二日市驛ふつかいちえきにて下車げしやするが可よい。(門司より五十六哩)

○武藏温泉

二日市驛ふつかいちえきの南一町みなみちやう、太宰府町たさいふちやうの西南せいなんに位し、無色透明むしよくとうめいの單純泉たんじゆんせんが、

都府樓の舊址 武藏温泉

二〇七



湧出する。口碑の傳ふるところに依れば、温泉の發見は、白鳳年間にして、菅原道真、配所にありて、しばし來て、浴したるところである。此地、風光の賞すべきなく、俗地であるが、交通至便なれば、浴客常に群をなして居る。(門司より五十六哩)

○久留米水天宮

久留米驛の西、八町ばかり、筑後川の南岸にある。祭神は、安徳天皇、建禮門院平時子にして、建禮門院に奉侍したる宮女、伊勢子の創建したるところ。東京蠣殻町の水天宮は、永正元年、此地より勸請したるものである。坂谷朗盧の詩に、

寒空落日筑川東。雪霽平郊渺茫中。數點瓊瓔銀嶺上。

水天宮映玉垂宮。

とある。

(門司より六十九哩)

○高山彦九郎の墓

寛政の三奇士の一に數へられた高山彦九郎の墓は、久留米市寺町遍照院にある。彦九郎は、上野の人なるが、九州巡遊のとき、慷慨悲憤、終に久留米の逆賊に自刃したので、此に葬つたのである。春風秋雨一百餘年、香華の墓前に絶えたことはない。京都三條の大橋の上にて、草莽の臣、彦九郎と云つて、跪坐して皇居を拜したることは、世の知るところである。(門司より六十九哩)

○將軍梅

久留米水天宮 高山彦九郎の墓 將軍梅



筑後三井郡宮の陣村にありて、久留米驛から約一里ばかりの所にあり。其の所在は、宮陣神社の境内である。昔南北朝のとき、征西將軍懷良親王、少貳頼尙と、大原野に戦ふたが、其のとき、御陣營の際、御手植の紅梅なりと口碑に残つて居る。今なほ繁茂して、花時には、杖を曳くものが多い。

御手植の梅の香やなつかしし。

後々の世までかはらす梅の花。と云ふ月並式の句がある。

○高良山

久留米から一里半のところにある。其の半腹には、高良神社と云ふがある。國幣中社にして、高良玉垂命を祭つてある。筑後四大社

の一にして、社殿莊嚴、多くの攝社を有し、社背の神籠岩なるものがある。周圍十五町、石壘を繞らし、其の構造の嚴然たること、恰も神代の山陵のごとくである。境内には、老樹蒼鬱として、神威の崇高なるを感せしめ、半腹には、櫻樹枝を交へ、山頂には、杜鵑花多く、眺望甚だ佳なるところである。(門司より六十九哩)

○神野茶屋

佐賀市の東北にして、停車場を距ること十七八町。舊藩主鍋島閑叟の遊園地にして、庭園は美をつくし、泉水には、清水を湛え、錦鯉の游泳唼嚼して、靜に尾を振り、我が所を得たるものゝごとく、木の石の布置、亭榭の構造等、極めて數奇を凝らし、一草一石といへど



九州地方

も、心を込めたるの跡、歴々として賞すべき価値がある。市の附近に於いて、最も幽静閑雅なるところを求むれば、先づ指を偲ぐるは、此處であらう。

(門司より八十一哩)

○松原神社

佐賀市にありて、停車場より十四五町、縣社にして中殿に藩祖鍋島直茂、左殿に龍造寺隆信、右殿に直茂の祖直正を祀つてある。境内は、一千二百餘弓、さまで廣くはないが、陶器の大鳥居と、同じ燈籠とは、ともに有名のものである。

(門司より八十一哩)

○田島神社

呼子村の對岸、加部島にある國幣中社にして、三女神を奉祀し、相

殿には、大山祇神、稚武王命を祀つてある。境内一萬餘坪、満山松杉を以て埋め、翁鬱として、中に數百株の櫻樹を交へたれば、花時には、白雲の棚曳くところ、深緑の掬すべきありと、其の眺は、得も言はれぬ。松浦潟一帯、無數の島嶼、一眸の中に集りて、其の風光の佳なる、實に名状は出来ぬ。境内には、彼の領巾振山の故蹟をのこしたる松浦佐用姫を祀つた小祠がある。松本衡の望夫石(領巾振山)を詠せし詩に、

啓吾夫。吾夫遠舉袂招。招不返哀。痛入骨命縷絶。爲介石立層巘。千年寂々鎖古苔。朝雲暮雨空去來。滄海之水深千尺。海波難及山頭石。石不言長含冤。

松原神社 田島神社



此に至らんには、西唐津驛に下車し、それより四里半。

(佐賀より三十哩)

○武雄温泉

武雄停車場から僅に六町である。むかし神功皇后三韓より凱旋のとき、發見せられたる温泉にして、爾來噴湧止むときなく、今に盛に湧いて居る。附近には、蓬萊山、白瀧の峰、三舟山の三山が、鼎立して、翠松の間に櫻、楓の點綴せるありて、春の朝、秋の夕、其の眺は、得も云はれぬ。浴舎十數戸、特に宏大なるもの數戸ありて、浴客は、常に多。

○名護屋城址

(門司より九十八哩)

肥前東松浦郡唐津村にありて、呼子と僅に小海峽を隔て、相對して居る。豊太閣、朝鮮征伐のとき、其の本營を置きたることは、青史に明かなるところである。其の舊址は、海濱一帯の地にありて、所謂松浦瀉にして、捕鯨は有名なる小川島、加唐島を控え、遠く壹岐島の山岳を雲煙模糊の間に臨み、風光の佳なるところである。豊公手植の蘇鐵といふのがある。安積信が、名護屋懷古の詩に、  
氣壓神州震百蠻。長驅直欲合區寰。崇墉遠映臺灣水。  
層閣平臨高麗山。縱是無功誠可驗。若教有命豈空還。  
秦實漢武同雄略。瑣々休論得失間。

西唐津驛から四里八町である。

(佐賀より三十哩)



○唐津松浦橋

松浦川に架したる長橋である。虹の松原の西から海に朝宗する川にして、此の唐津港に注ぐところに、此の橋が架してある。橋上の眺矚は、頗る絶佳にして、殊に、夏の夕、袂を輕風にそよがせて、欄干に凭れると、其の心氣の爽なること、一日の勞を忘れ、心身を休ませることが出来る。定家卿の歌に、

沈めけん鏡のかけやこれならん、

松浦の川の秋の夜の月。

實景を寫し得て遺憾がない。

(佐賀から西唐津まで三十哩)

○舞鶴公園

舞鶴公園は、唐津町の東北にありて、文祿年間、征韓の役、豊臣秀吉の築きたる舞鶴城の北にして、山に倚り、海に面し、磴石の狀、梅櫻の花ともに景致を添へて居る。舊本丸の跡は、地、高燥にして、松浦灣内の風光、指呼の間にありて、其の眺矚の美は、附近に比すべきものは無からう。

こゝもまた目にもとまらぬ景色なり、

松浦がたの夕ぐれの波。

西唐津驛よりするのである。

(佐賀から三十哩)

○七 鎌

西唐津驛より二里ばかりなる港村の海岸、神崎といへる小岬にある。

唐津松浦橋 舞鶴公園 七 鎌



全岬玄武岩より成るものにして絶壁削立、其の尖端は、いづれも分岐して、稍三叉状を呈し、其の東にあるもの、基脚に、七箇の横洞の並列して、竈を並べたるやうである。若し風なく、浪静なるときは、舟に棹して、洞中に入ることが出来る。西の二洞は、相並列して、内相通じて居る。神工鬼斧、能く筆舌の盡すところではない。實に宇内の絶観と云ふべきであらう。(佐賀より三十哩)

神の世に誰が造りけん七かまど、  
浪たつときの聲ぞおそろし。

○熊本城

一に銀否城ともとなへる。熊本市の中央にありて、慶長年間加藤清

正の築いたところである。堅牢無比、天下の名城と稱へられて居る。明治十年の役、谷將軍が、孤軍嬰守、よく五旬の久しきに耐へ、潮のごとく寄せ來たりし薩軍の銳鋒を支へしは、此の城にして、隅櫓その他二三の毀壞せられたるも、尙は舊觀を存して、當年を語るもの、ごとき見える。今は、第六師團の營所となつて居る。

○本妙寺

熊本市の隣村花園村にある法華宗の大伽藍にして、日眞上人の開基したるものである。加藤清正の廟は、此にある。門内の兩側には、寺院相連り、夙に其の巨刹を知らしめる。(門司から百二十一哩)

頼山陽が、加藤公の廟に謁すと題せる二首の詩あるが、其の一は、



起身戚屬是嫖姚。早而邊城遠舉燕。結髮年皆知李屬。噤啼兒尙略張遼。有巢寧料鳩因鳴。生子誰言豹繼貂。空使遺民蔽伏一。蘇山雲霧恨難消。

○成趣園

俗に所謂水前寺といふもので、昔禪刹水前寺の在りしところ、後、肥後の守將細川氏の別業となりしが、今は、開放して、遊園地となつてある。假山泉石の趣、木石の布置、人工は、よく天工を奪ふたかと怪まれる。殊に地は、清幽にして、清冽なる泉井の湧出して池となれる、其の優秀なること、蓋し九州第一に推さざるを得ないであらう。藩祖の祠廟たる縣社、出水神社がある。其の東方八町に一

の馬場がある。むかし加藤清正の軍馬を訓練せしめたる所と傳へて居る。熊本驛から約一里の所にある。(門司から百二十一哩)

○阿蘇山

熊本から東十一里にある噴火山にして、九州の中央に位し、白川の水源をなして居る。山頂の噴火口には其の直徑長さところ七里、短きところ四里、其の絶大なることは、世界に無比である。此の山、盤距數里、分れて五峯となり、高岳、杵馬岳、猫岳、中岳及び櫛尾岳の五つである。今噴火しつゝあるものは、中岳にして、硫黄の蒸氣濛々として昇騰し、凄愴慘憺、實に言語に絶する。天の將に明けんとするとき、遠くこれを望めば、濃淡黄白の煙は、雲のごとく、



山巔を罩めて、其の美觀は、蓋し譬ふるに物がなない。山北にある阿蘇神社は、官幣中社にして、社殿は、古代の構造に成り、素朴にして古雅。金碧の燦爛たる、俗臭の紛々たるとは、自から選を異にして居る。樓門に掲げたる扁額は、熾仁親王の御染筆にかゝるもので、墨痕雄勁、なほ神威の高さを知らしむるものがある。田植祭と稱へて、古風なる儀式の行はるゝは、毎年七月二十八日にして、其の古雅なることは、外に見られない。秋山儀の詩に、

天然研他石。片水含空青。誰識山靈或。供余寫黃庭。

とある。此に至るは、熊本よりするが順路であらう。

(門司から百二十一哩)

○菊地神社

南朝の忠臣、菊地武時を祭り、なほ武重、武國、武光、武政、武朝をも配祀してある。此の境内は、近くは矢筈、鞍が岳の峻嶺を望み、遠くは阿蘇の雲煙を天漢に望み、菊池、逸間の二川、涎々として左右を流れ、其の風光の佳なるに加へ、數百の櫻樹を栽えられたれば、花時の賽客は、少なからぬと云ふ。地は、菊地郡隈府町にある。熊本より約八里以上ある。

○山鹿温泉

肥後の山鹿にある。口碑の傳ふるところに依れば、宇野親治、此地に狩を試みたが、鹿の傷を受けて、温泉に浴することあるを聞き、



始めて之れを發見したるところにして、頃は、保元二年十二月二十日と云ふことである。故に今も尙ほ毎年十二月二十日には、湯祭となへて、祭祀を行ふことになつて居る。前記の隈府町より西の方七里七町にある。

○林温泉

此の温泉は、土地の僻在したると、従つて交通の便の悪さによりて、久しく世にも聞えず、僅に附近農民の入浴するのみとなつて居たが、近來肥薩の縣道の開鑿せられ、且つ汽車が、鹿島まで通ずることゝなつたので、交通の便を得たるに依りて、俄に浴客の集來することゝなつた。地は玖摩川の沿岸にありて、泉質硫酸を含有し、

婦人病、創痍、及び皮膚病に特効がある。人吉驛より三十二町。

(門司より百七十七哩)

○球摩川の急流

球摩川には、二つの水源がある。一は、五箇庄村白鳥岳に發し、一は、五箇庄村の東南片尾山より出る。二水は、人吉の東に於いて、相合し、二十八里にして、海に注ぐのである。人吉以下、急潺奔流して、舟を通ずること、僅に十里に過ぎない。而も舟子が、慣熟せざるものなるときは、往々危険に陥ることがある。山田宮齋が、作に、肥後陣中と題して、

水色如銀月色流。砲聲斷絶夜悠々。清風一陣吹塵去。

林温泉 玖摩川の急流



占得玖摩川上秋。

○宮崎宮

日向の大宮村に鎮座まします宮居にして、縁起に依れば、神武天皇の皇子、神八井耳命、其の御子、天建盤龍命が、神祖神武天皇宮居の跡に祠を建て、天皇を奉祀したとある。明治十八年、官幣大社に列し、近年社殿を改造し、結構壯麗、ますます神威の赫灼たるを感せしめられた。

○青島

日向宮崎から四里の地にありて、満潮のときは、島となりて、舟行にあらざれば、行かれぬが、干潮のときは、半島となりて、歩して

行くことを得られる。周回十八九町の小島にして、全島、熱帯植物を以て満たされ、殊に檳榔子の樹が、亭々として四時綠色をか、ず、真に青島の名に背かぬところである。島中に祠がある。

○鵜戸神社

日向南那珂郡鵜戸村にある官幣大社にして、鵜鶴草葺不合尊を祀つてある。崇神天皇の御宇、創始せられたるところにして、桓武天皇の朝に再興せられた。域内約七萬坪、内に一大岩窟がある。尊、御降誕の地なりと傳へられて、本宮をば、此の窟内に祀つてある。海岸には、巨巖の峙立し、奇態殆ど名状が出来ない。背後は、峰巒重疊し、境内は、老樹鬱蒼、神さびたるなど、自から崇敬の念を起し、

宮崎宮 青島 鵜戸神社



九州地方  
襟を正さしむるに至る。

○別府温泉

別府は、別府の灣頭にありて、古來著名なる温泉場として知られて居る。海岸は、沙汀に、溪谷に、丘上に、行くところとして温泉の湧立せざるはなく、見るとして温泉ならざるはない。湯の瀧、湯の池、湯の川など、到るところにある。海岸沙汀を手にて掘れば、温泉の湧出するにても知られる。單純泉、酸性泉、硫黄泉、炭酸泉、鹽類泉など、殆ど温泉の種類一として備らざるはない。別府の温泉か、温泉の別府か、浴者一たび足を此の地に踏み込めば、必ず其の多様多量なるに驚かざるものはないとのことである。年々の浴客は、

七八十萬人を下らぬとのことであるが、如何に其の繁盛なるかを知らしめる。其の北に又、龜川の温泉がある。旅舎民戸約一千戸、いづれも自家に浴槽を設けて、温泉を引いてある。如何に其の量の豊富なるかを知らしむるに足る。

(門司より八十二哩)

○觀海寺

別府町を距ること、西の方二十町、石垣原の古戰場をへだて、豊後の海に瀕し、碧波萬頃、白帆風を孕んで矢のごとく走り、黒煙を數町の後に曳いて、船首に雪を碎くの汽船など、一眸の中に集まり、風光快絶、湯瀧ありて浴することが得られる。(門司より八十二哩)

○海地獄

別府温泉 觀海寺 海地獄



別府町より西北一里餘、直徑數丈、其の深さ測るべからざる一大洞にして、深綠色を帯びて、蒼海のごとく、これより渦き騰るところの蒸氣は、濛々として悽愴を極め、遠く數里の外より望見することを得べく、こゝに落つるときは、再び生還すること能はざるのみか、其の體軀は、到底此の世に出ない。

○島原温泉

肥前温泉が岳の西麓に位し、温泉は、所々に湧出し、其の最も噴出の盛なるものは、七八間の高さに騰るものがある。泉質硫黄を含んで、臭氣がある。旅舎は、筧によりて、温泉を導き、客をして入浴せしむる設備で、いづれもよく整頓してある。地は、海拔六百餘尺、

四方廣潤、空氣清涼、夏時涼氣に富み、最も避暑地暑として推すに足る。特に此の温泉は、外國人に知られ、夏時上海、香港等より來たり浴するものが多い。此に至るには、海路島原よりせば、最も宜しかるべく、六里内外はあらうと思はれる。頼山陽、温泉の歌、

温仙温且季。高郎高且雄。温仙宜爲高郎婦。玉立對峙門望同。

一水盈々情脉々。知他岳神交飛越。仙麓別起兩峰凹。尖然莫是

凌波鞞。

○島原

回顧すれば、寛政四年、一夜雷電轟々、天柱摧け、地維缺くる底のことありて、眉山爆發、大鳴動をなし、海を埋め、海嘯起つて、對



岸熊本地方の沿海を襲ひ、人をじて、避くるに違あらしめず。此のとき、此の島原の港の現出したるものにして、地變の構成によつて、數十の島嶼、海門に碁布羅列し、今は、沿岸白砂は、青松を載せて相連り、環浦曲洲、風光絶佳、日本三景と兄たりがたく、弟たりがたきの地となつて居る。其の港は、深く彎入して、水深く、大船巨舶を泊することを得べく、市街に清泉の湧出して、貫流するあれば、戸々これを引いて、飲用に供するなど、水道のごときものである。

○長崎大徳寺

長崎市にありて、磴を登ること數百級、境内には、有名なる藤棚がある。花時の盛觀、とても筆舌の盡すところではない。故に來觀者、

頗る雑沓を極む。地は、高燥なれば、市街を眼下に眺むべく、風光の佳なる一の勝區である。

仰むけば顔にかゝるや藤の花。

○諏訪神社と諏訪公園

長崎市の東北部なる玉園山の半腹にありて、社殿宏壯、眺望に富んで居る。此の祭禮は、最も見るべきものにして、十月一日より十三日まで、稚兒をして諸種の踊をなさしむるものにて、賽客は、群集雑沓、殆ど名狀すべからざる狀である。蓋し九州第一に推されて居る。これに隣りて、公園がある。土地高燥、眺矚に富み、市内隨一の風景を占め、港内を一眸の中に入れ、知らずく快哉を叫ばしむ

長崎大徳寺 諏訪神社と諏訪公園



るところである。園内に池あり、噴水の装置をなし、緑樹鬱蒼、夏時炎熱を忘る。眞に仙境と云ふも誣言ではなからう。

○九段寺

佐世保内市濱田町にあり、天曆五年、空也上人の草創に成りしところ。往昔は、堂宇極めて宏壯、稀に見るの伽藍として、遠邇に其名を馳せたが、しばし祝融氏に見舞はれ、加ふるに洪水の難を蒙り、僅に其の面影を留むるのみとなりしが、信徒は、大に之れを慨し、明治二十九年、土工を起し、數年を経て、漸く落成するに至つたされど、舊時の幾分に過ぎぬとのことである。

(門司より佐世保まで百二十六哩)

○福石観音

佐世保は、夙に勝景の地を以て、聞えて居るが、更に、勝形の地を求むれば、先づ此の福石観音を推さざるを得ない。地は、高く、老樹は、茂りて、幽静の仙境をなし、眺望に富んで居る。竹崎観音、湯江観音、田結観音、糊崎観音、堂崎観音と、もに、七観音の一に數へられてある。

(門司より百二十二哩)

○鄭成功の碑

肥前北松浦郡なる千里が濱の一方、數株の老松、縁濃なるところに一大碑がある。即ち鄭成功の碑にして、人をして坐に明末の忠臣の苦節を偲ばしむるものがある。成功の母は、河内浦の土豪田川某



の女、成功の父、芝龍に嫁して、成功を産みたるものである。巢林子が、これに國性爺の演題を附して、劇場に上してよりは、漁夫山樵といへども、普く其の事を知るに至つた。其の附近には、成功の宅址、其の手植の竹柏なども残つて居て、空しく古を教ふるもの、ごとく感ぜらるゝ。

蟬なくや碑のかけ暑し松青し。

平戸は、島であるから、何れよりするも船に依らぬばならぬが、目の浦から渡るのが、最も近い。

○海神社

對馬上縣郡峰村に鎮座まします國幣中社にして、豊玉姫命を祭つ

てある。草創の年月は、詳でないが、古色蒼然として掬すべく、是等より考ふるときは、中古の頃であらうと思はれる。海濱に大鳥居がありて、これより本社までは、數町もある。後は、鬱蒼たる山を負ひ、前は海に臨んで居る。漁夫のこれを信ずること、頗る厚く、日々の賽客は、少くない。祭禮は、頗る古風の狀があると云ふ。

○磯島津邸

島津氏の別業にして、後に翠巒を負ひ、前は、櫻島に對し、西南は遙に開聞岳を望見し、煙波百里、風光秀絶、多く得がたきの勝地である。頼山陽が、

海門山外輕鷗飛。鷗背長天一良秋。憶得劉郎舊詩句。



煙波徐滿是琉球。

こは、此の邊の景趣を述べられたものであらう。

(門司より鹿兒島まで二百三十八哩)

○鶴丸城址

古の鶴丸城、即ち鹿兒島城は、鶴丸山の麓にありて、全山、老樹蒼鬱として、晝晦く、幾百年も、斧斤の入らざるところである。鹿兒島の市街を瞰下し、形勝の地を占めて居る。加ふるに、錦江灣を隔て、櫻島に對し、遙に霧島山、開聞岳の諸岳の雲表に聳ゆるを望み、其の風光は、筆舌のよく盡すところでない。明治十年の役、西郷隆盛の戦歿したる岩崎谷は、山の後の狭谷にして、當年潛

居したりと傳ふる土窟は、今尙は残つて居る。近來公園を設けて、公衆の遊ぶに任せてある。

八 東山道西部地方

○長良川の鵜飼

長良川の鵜飼は、夙に有名なるものにして、五艘又は七艘の船に、鵜匠の乗込めるものにて、鵜匠は、腰蓑を着け、風折帽子を載せて、頗る古風のものである。夜陰、月なきときに於いて、行はるゝものにして、鵜船は、一種の横陣を備へ、舷頭に篝火を照らし、鮎の其の光をしたひ。これに群集するに乗じて、鵜をして捕へしむるもの

鶴丸城址 長良川の鵜飼



にして、七八尾ばかりも呑め込みたりと思ふ頃、鵜に結びつけたる綱を手繰りて、多数の鵜を繰縦する状、いかに慣れたりとは云へ、其の巧妙なること、數十の鵜が出没自在、綱の一丝亂れざるは、唯、感ずるの外はない。鵜船一隻の捕ふるところの鮎は、多きときは、一夜よく二千尾に餘るとは、驚くべきである。

(新橋より岐阜へ二百五十四哩)

○金華山

岐阜市の郊外にある。織田氏の舊城址にして、一に稻葉山とも云ふ。山頂に登れば、長良川の清流、脚下に素練を展べたるがごとく、遠くは大垣の邊をも望むことが得られる。實に風光明媚の勝區である。

(新橋より二百五十四哩)

其の麓には、岐阜公園がある。長戸讓の岐阜懷古に、

岐山百仞鬱崢嶸。萬古俱高阿吉名。雲氣自留旌旆色。

江統長迸鼓鬢聲。菅宮有址寒飈嘯。敗堞無人蔓草生。

追撫英雄創葉跡。滿襟悲激淚縱橫。

○養老の瀧

大垣驛より道路平坦、三里にして達する。瀧は、絶壁の上より落下し、其の下に一つの巨岩ありて、其の水を受く。故に瀧壺と云ふも、僅に膝を没するに過ぎざれば、こゝに入ることが得られる。孝子源承内の事蹟は、科學的眼光より現れば、一顧の價もないが、之れに



東山道西部地方

二四二

よりて、瀑名は、著しく世に知られて居るかと思はれる。元正天皇、此の地に行幸ありて、靈泉の瑞を感賞せられ、これを養老と名づけられた。其の二年、再び行幸あらせられた。聖武天皇、天平十二年、伊勢に行幸あらせたまふたとき、此の地に臨幸あらせられた。是等は、みな國史に載せられたるところである。春花秋葉ともに、遊賞に價すべく、近時こゝに曳を曳くもの、漸く多くなつた。岡本謙の養老の瀑布の詩に、

久勞夢想未能行。今看雲間瀑水清。裂玉噴珠虛壑色。

青天白日振雷聲。天龍再駐宸遊跡。千載長傳孝感能。

回憶當年阪之際。無窮聖澤及群生。

新橋よりすれば、大垣にて下車するが可い。(新橋から約二百六十三哩)

○關ヶ原古戰場

關ヶ原は、中仙道の一驛にして、別に北國海道がある。近傍には、不破の關の舊址が、僅に其の名残を留めて居る。慶長五年、九月十五日、昨夜、大雨を冒して、大垣を發したる西軍は、石田三成をはじめとし、島津義弘、小西行長、宇喜多秀家の諸軍が、前後相踵いで、關ヶ原に達し、各々其の陣地を其の西部に布いた。かくて、家康の陣所は、桃配山の麓に置き、西軍は、天満山の東に布陣し、松尾村を前にして、東軍と相對した。松尾村は、關ヶ原の東北にありて、小早川秀秋が、陣を置いてある。垂井の北にある南宮山には、

關ヶ原古戰場

二四三



東山道西部地方

吉川と毛利とが、陣取つて居る。池田、淺野の兩軍は、垂井に陣して、これに當ることゝなつて、手配りがついて居た。處が、小早川秀秋が、家康に内應して、味方の軍を攻めたのと、吉川廣家等の輩も、家康の軍と密約あるから、兵を動かさずに終つた。是に於いてか、西軍は、大敗して、家康は、徳川の天下をつくる素地を作つたのである。實地に就いて、仔細に、其の跡を尋ねたならば、當時の戦況の如何は、知られるであらう。  
 (新橋より約二百七十一哩)

徳川流派出英雄。萬世鴻基一戰中。從是四方安堵者。

謳歌朝觀内關東。

とは、太宰春臺の關原を過ぎたとき之感興である。

○南宮神社

官幣中社にして美濃の國の一の宮である。祭神は、金山彦命にして、相殿には、彦火火出見命、見野命を祀つてある。社傳の云ふところにては、神武天皇の元年、不破郡府中村に創建し、後、崇神天皇、五年十一月、今の所に遷座したものとある。後、關が原の役、兵燹にかゝりて、烏有に歸したりしが、寛永九年、幕府これが再興をなしたるものにて、現今の社殿は、即ち之れである。前項と同じく關が原から行けば可い。

○不破の關址

美濃不破郡關原村にあつて、日本三關の一に數へられて居たもので

南宮神社 不破の關址



東山道西部地方

二四六

ある。天武天皇元年の創建である。後、桓武天皇、延暦八年、これを廢したる後は、只、其の名の徒に世に残つて居るのみで、何處がそれを後世、其の所を求むることが出來ないであらうとのことで、今は、民家の傍に一の碑を建て、これが標としてある。

人すまぬ不破の關屋の板びさし、

あれにしのはたゞ秋の風。

との歌がある。

又此に至らんには、前記と同じく關が原にて、下車するが可い。路程は、僅に十數町に過ぎぬ。

(新橋より約二百七十一哩)

○霞間が谷

美濃揖斐郡本郷村にある幽靜の地にして、一に鎌が谷又は釜が谷とも稱へる。夙に櫻花の名所として、世に知られて居るが、松樹の間に點綴するのと、且つ楓樹の多いのとで、常に春の花のみでなく、秋の紅葉にも、杖を曳く雅客は、少なくない。なほ清流は、此の地を縦横して流れて居るので、夏時涼を容るゝに宜しく、避暑の地としても、極めて可い。又雪景を賞するにも、大に可いとして、人々の謂ふものがある。されば、四季を通じて、遊覽に適して居る。

春はさくらに明けにけり。

そよ吹く風のいつしかに、

過ぎて來にけり夏の頃、

霞間が谷

二四七



東山道西部地方

清き流に掬ひてし、  
水はうつりし其の月は、  
秋ならなくに涼しかる、  
身にしむ秋の空たかく、  
紅葉の錦おりなせる、  
花よりもなほ麗しき、  
景色はいつか白妙の、  
雪の世界となりけり。

○虎溪山永保寺

南禪寺派に屬する禪刹にして、境内頗る廣濶、溪流の潺湲として

流るゝがあり、古雅の愛すべき橋を架するがあり、巨岩の蟠屈するもの、天に朝するもの、横に這ふもの、千態萬狀、殆ど盡されぬ。實に風致に富みたるところにして、此の附近にては、これに比肩すべき所はなからう。元來此の寺は、正保二年、夢想國師の開基したるものなるも、法弟佛德國師が、其の開基となつて居る。其の禪堂は、雲水の修行場となつて居て、諸國より來集するものは、頗る多い。○觀音堂、開山堂の二字は、足利時代の建造物にして、特別保護建造物に指定せられてある。此に至らんとするには、多治見驛よりするが順路であらう。(新橋より名古屋を経て、二百五十八哩)

○寢覺の床

虎溪山永保寺 寢覺の床



東山道西部地方

二五〇

信濃にありて、木曾福島町より二里半。木曾川の兩岸、相迫りて、碧潭を凝らし、花崗石の巨岩蟠屈錯綜して、千態萬狀、ことごとく名狀は出来ない。其の東岸にありて、最も名あるものは、腰掛岩、象石、獅子石、葛籠石、床石を最として、西岸にあるものは、屏風岩、硯岩、烏帽子岩、蓮華岩、釜岩、俎岩、浦島の釣舟岩などがある。實に木曾山中の奇勝である。

近衛家熙卿は、

谷川の音にはゆめもむすばじを、

寢覺の床と誰が名づけゝん。

又俳人士朗は、

春の月、ねざめの里を通りけり。

とある。

(東京萬世橋より福島まで、約百八十哩)

○木曾の棧道

木曾福島町を距ること一里半。往古此の間は、藤蘿をからみて、これを掛橋となし、此の上を通行したので、此の名が今に残つて居る。慶安年間、尾張の藩主は、有司に命じて、山岨に築かしめたるものは、此の所謂棧道である。今は、道路の、大いに開修せられて、坦々として車馬を通ずるのみならず、汽車さへも、木曾を走るやうになつたる人力は、如何に天嶮をも平夷にすることが出来るかは、これで證せられる。芭蕉の、

木曾の棧道

二五一



かけはしや命をからむつたかづら。

の句碑が、路傍にあるが、唯其の昔の語り草たるに過ぎぬ。(同上)

○氷が瀬

信濃西筑摩郡玉瀧村にある玉瀧川の溪流の峻岩に激して、奔湍となり、湛へて碧潭となりたる所に一條の長橋がある。これを氷が瀬橋といふのである。此處は御岳に登るべき要路に當つて居るので、路は、いよ／＼峻岨で、兩岸は、絶壁となりて、密樹が、これを被ふて、真に幽静の一勝區といはねばならぬ。木曾誌に、其の勝は、木曾山中に冠たるにあるによりて、其の如何を知ることが出来る。此處へ行くには、やはり木曾福島にて下車するが順路である。(同上)

若し中央線に依るときは、飯田町より甲府を経て、木曾に入るが、順路である。併しこれは、時間に不經濟である。

○岡谷

中央線岡谷驛の附近、即ち諏訪湖の西岸に位して居る天龍川の落口なる平野、川岸の兩村に跨りて、大家高樓の軒をならべ、煙突の林立し、煤煙の濛々として立騰つて居るのを見ると、此の山間の僻地にも、此のごとく繁盛を極めて居る所があるかを疑はれるくらいである。之れは製絲を以て有名なる地にして、更に其の附近の諸村を併すときは、工場の總數は、百四十に餘る、釜の數は一萬八千内外もあるとのこと、長野縣下に於ける十分の四乃至五は、此處



にあるので、我が國第一の製絲場として夙に其の名を擅にして居る。動力は、はじめ水力、蒸汽を用ひて居たが、今は、多くは電力を利用するに至つた。年々我が邦より輸出する生絲は、一億圓内外で、先づ貿易額の第一位を占めて居るが、是等は、實に斯くのごとき工場から、かよはい女の手によりて、製せられたものである。

指先に操出す高は一億萬。

とは、此の邊の狀態を云ふのであらう。(飯田町より岡谷へ百二十六哩)

○諏訪湖

諏訪湖は、海拔二千六百餘尺の高地にありて、周回五里に餘り、山岳これを繞りて、一大明鏡をさらしたやうである。富士見の分水嶺、

八ヶ岳の裾野等より出づる多くの溪流の集積して、此の一大湖を形成したものである。かくて其水の溢れて、西方山岳の間を破り、天龍川の水源となる。此の邊一帶の地は、古來瑩の名所として聞えて居る。其の落口に一つの橋がある。これを天龍橋と名づけてある。すはの海衣が崎に來て見れば、

富士の上こぐ天の釣舟。

と云ふ歌がある。如何に其の風光の絶勝なるかい、知られるであらう。湖は、冬期に至れば、氷結して厚さ一二尺にも達し、重砲を其の上に曳くも、破れることは無い。近年好箇の氷滑場として、世に知られて居る。故に一月から二月へかけて、こゝに集い來たりて、



東山道西部地方

二五六

此の戯を戦はず人は、少なからぬことである。湖畔に温泉の湧出するありて、上諏訪、下諏訪の兩町に分れ、多くの旅舎は、いづれも温泉を引いて、浴槽に湛えてある。

(飯田町より上諏訪へ百二十一哩、下諏訪へ百二十四哩)

○浅間温泉

松本市より約三十町の所にある。其の道路は、半爪先上りなるも、人力車を通ずる。上下の兩浅間に別れて居る。温泉の湧出口は、約六十餘ヶ所ありて、單純泉にして、無色透明、無臭無味、温度は九十五度乃至百二十五度、内湯として名あるものは、目能湯、御座の湯、御座の湯、琵琶の湯、柳の湯、錦の湯、梅の湯、竹の湯、實の湯、

松の湯、櫻の湯、鶴の湯、龜の湯、桐の湯、菊の湯、白の湯などである。是等は、いづれも皆、温泉宿の名に取つて居る。

(飯田町より松本へ百五十二哩)

○諏訪神社

諏訪湖畔の上下諏訪に分れてある。官幣中社にして、其の上社は、上諏訪町を距ること一里半の中洲村にある。信濃の唯一の大社にして、信濃一の宮の稱へがある。健御名予命、其の配神八坂刀賣命である。此の地は、實に健御名方命の狛業の地である。社殿の規模の宏大と、境内の幽邃なるとは、神威の自から人に迫るを覺えしむるものがある。古來武田信玄、田村麻呂等のごとき武將の崇敬深

浅間温泉 諏訪神社

二五七



東山道西部地方

二五八

く、實に日本にありて、第一の軍神となへられて居る。年々四月十五日の例祭をはじめ、年中行事の嚴なる、殊に七年に一回の御旗祭は、其の名、遠近に聞えて居る。下社は、下諏訪町にありて、祭神は、上社と同一である。二月一日の遷座祭と、八月一日の例祭には、神輿を兩社に交替遷座するの舊慣がある。兩社八町の間、其の遷座式の盛觀なること、地方に於いては、容易に見ることが出来ぬであらう。

逍遙際が、

宮柱いくたび立てん君が代は、

動かぬ天がしたつ岩根に。

の詠がある。又蕪村の、

神宮寺の松に吹かるゝ鳴子かな。

の句がある。

○善光寺

善光寺は、有名の靈刹にして、定額山と號し、天智天皇の三年に草創したるものである。當時は、天台宗であつたが、後眞言宗に改め、寛永年間、再び天台宗となつたのである。元祿十二年の火災後、寶永四年に再築したもので、其の構造は、南向の棟領づくり、二重屋根、御所棟唐破風にて、すべて平城の宮の朝集殿を模したものであると傳へて居る。明治四十二年、特別保護建造物に編入せられた。

善光寺

二五九



本尊は、欽明天皇の十三年、百濟から貢献したる阿陀彌佛の金像である。宣雉五年、勅命によりて本尊を秘佛として、寶龕に納めやうとするとき、開祖岩麻績東人、金銅にて其の三體を構造したるものを前立として、今や時々開帳せらるゝものである。明治三十九年、國寶に編入せられた。本堂の内、佛像の後面、幽屢に入るの道がある。案内者ありて、賽者を導くが、恰も隧道の中に入りたるがごとくにて、暗黒物の色がない。半に至れば、一つの鍵がある。人、此の鍵に觸るゝことの出来ないときは、極樂淨土に入ることを出來ぬとつたへて居るので、此に入るものは、唯、其の鍵に觸れんことをのみ苦心して居る。立つて歩みて、手を壁につけて撫しつゝ行くと

きは、普通の大人ならば、自から鍵に觸るゝやうになつて居る。かくて、道は、曲折して、自から外界に出らるゝ様になつて居る。

(飯田町より長野へ百九十一哩)

○城山

長野市善光寺から東に當つて、一の丘埠がある。假寢の岡となへて、一には、城山とも云ふ。横山氏の古城址にして、丘上には、八幡宮がある。城址の三面は、今は拓きて、公園となし、竹樹泉石の美よく、備つてある。其の中腹に城山館と云ふのがある。樓上から眺むれば、千曲川、犀川の碧流、河中島の古戰場、須坂の薨など、一眸の中に集つて來る。其の流域の平野は、善光寺平と稱へて、信



東山道西部地方

二六二

濃にては、松本附近と此處とが、最も廣い平野である。(同上)

○河中原古戰場

長野から千曲川に沿ひて、下りたるところは、即ちそれである。武田、上杉兩氏が、幾年の間の對戦地にして、史上にあらはれて居る。地は、更級郡の東北隅、千曲川と犀川との二水の相合流して、信濃川となる所にある。昔は、埴科、更級、水内、高井の四郡に跨つて居たので、河中島四郡の地と唱へて居た。頼山陽の、

鞭聲肅々夜渡河。曉見千兵擁大河。遺恨十年磨一劍。

流星光底逸長蛇。

の詩によりて、何人も知るところである。又室鳩巢の、

二川流血兩雄爭。勝敗于今猶未平。一望戰場煙霧裡。

西條山接海津城。

と云ふ詠がある。

秋さむし川中島のその昔。

此處へは、篠の井驛にて下車するが便利である。(飯田町より百三十三哩)

○姨捨山

信濃更級郡更級村にありて、古來著名なる觀月の勝地として知られて居る。山は、冠着山の一小支峰たるに過ぎないが、山頂には、姨石と云へる巨岩の屹立するありて、其の高さが五丈餘、横十間餘にして、其の側に一の桂の樹がある。又宗祇の碑ありて、

姨捨山

二六三



東山道西部地方

二六四

あいにあひぬ姨捨山に秋の月。

又芭蕉の、

係や姨いとりなく月の友。

の句碑もある。姥石に倚りて、一の草菴がある。これを觀月殿と稱へる。其の庫裡を月見堂と云ふ。欄を設けて客の觀月に便にしてある。若し夫れ仲秋、雲なきの夜、一團の明月、水田に映じて、所謂田毎の月なるものを現すに至つては、其の快味、蓋し名狀すべきものがなからう。姨捨驛にて下車すれば、僅に數町である。(飯田町より中央線に依りて百三十五哩、信越線によりて上野より篠の井まで百二十九哩)

○戸隠神社

長野市善光寺の西邊より直ちに山に上り、漸次道は、峻坂となり、又或いは渺茫たる野原を過ぎて、五里十町にして、達する。路峻峻なるも、飯綱の原よりは、山腰を廻るのであるから、さまで峻しくはない。やがて中社に達し、それより三十町にして、本社に至るので、其の間は、峻坂崎嶇として、最も行歩に惱まされる。本社は、岩窟に造りかけて、其の側には、神輿庫、權現社、御供所等がある。又山中に木曾殿の古址、長明火足所、龍が舟、釜添岩、潜り岩、小富士等稱へるものがある。旅館は、舊社家にして、いづれも宏壯である。祭神は、手力雄命にして、縣社である。

○碓氷嶺の紅葉

戸隠神社 碓氷嶺の紅葉

二六五



碓氷嶺は、上野信濃の國境に峙立せる峻峰にして、嶺上楓樹多く、晩秋霜に傲るの候に至るときは、満山の紅葉は、恰も錦繡を曝すがごとく、ために山の燃ゆるかと疑はるゝほどである。其の壯觀なること、蓋し稀に見るの勝景であらう。現今は、信越線の鐵路、此の山に架設せられて、アプト式の布設によりて、一睡の間に往復することを得るが、舊道は、峻嶮にして一步に一休、喘ぎ喘ぎ上つたもので、羊腸曲折、懸崖直ちに數十仞の深溪に迎へられ、巍峨たる峰巒は、目前に屹立し、其の腹腰を廻りくゞて行くのであるから、頭上に見ゆる茶屋に至るにも、十數町を迂回せねば到達することが出来ぬ。景行天皇の御宇、日本武尊が、東夷征伐、凱旋のとき、東方

を御覽遊ばされ、吾孀者耶と歎せられたまふたとは、即ち此の處である。此のアプト式は、信濃輕井澤より上野横河までの間、七哩の軌道にして、隧道を穿つこと二十六、延長一萬四千六百四十呎、橋を架すること十八、軌道は、本邦にて他に類例のない齒止式のものである。大窪詩佛の詩に、

雲脚如煙谿地過。樹梢零露濕輕莎。行人相遇多相問。

山下今朝有雨麼。

信越線にて行くもので、上野より横川まで八十一哩。輕井澤まで八十八哩である。

○輕井澤

輕井澤



東山道西部地方

二六八

信越線輕井澤驛より十餘町の一小村落に過ぎずして、風光の賞すべきものなく、風致の掬すべきものもないが、地は、淺間山に近く、高燥にして空氣は、清新且つ三伏炎暑の候といへども、涼味の掬すべく、更に夏なることを知らぬ。故に近年外國人のこゝに避暑するもの漸く多きを加へ、邦人も亦これを倣ふて、別莊を營むものが多いので、夏期に至れば、都人士のこゝに來たるものは、少なからぬのである。

輕井澤こゝには夏は來ぬらし。

とは、駄句ながら、眞を穿つたものである。(同上)

○淺間山の噴煙

信濃北佐久郡の北端にあつて、海拔八千二百三十尺、本邦有名の活火山にして、頂上より間斷なく水蒸氣を噴出し、時に灰又は砂礫を飛ばし、動もすれば、巨大なる岩石を噴出し、溶岩の流れ、山頂を彩るなどのことがある。天武天皇、白鳳十四年に爆發し、爾後しばらく大噴火ありて、山麓の諸村が、其の害を被むることは少なからぬことである。坑口は、直徑約一千尺もあらう。其の側に淺間神社の石祠があつたが、噴火のために壞された。釋敬惟が、

山勢峻嶮黨碧天。日華爭映雪華懸。神仙宅在最高峰。丹竈食坐五彩煙。

との詠がある。

(同上)

淺間山の噴煙

二六九



東山道西部地方

○別所温泉

信州上田より西の方二里二十餘町、其の院内にあるものは、石湯、久我湯、大師湯、倉澤湯、又大湯にあるものは、大湯、立齋湯と云ふ。泉質は、硫黄泉に屬して臭氣あり。石湯は、天然の石槽を用ひて、浴池となつて居るが、湯は、其の底から湧出して居る。温泉宿は、湯川の清流をはさんで並んで居る。(上野より上田へ百十三哩)

○湯田中と澁の温泉

信濃下高井郡の南部にありて、前に星川の清流を控え、後に湯平の高丘を擁し、東に笠岳、岩菅等の諸山、峰岳重疊し、西北は、開けて居る。總湯、鶴の湯、綿の湯、千代の湯など稱ふるものがある。

殊に總湯は、華氏百六十三度の熱湯なれば、水を混じて浴する。泉質は、鹽類泉にして無色透明、内服するも効がある。信越線田中より行くべく、又豊野からも四里餘にして達する。澁温泉は、湯田中と僅に六七町を隔つるのみで、其の泉質、温度のごときは、すべて湯田中と同一である。榎澤の水鶏、大鹿山の月、笠岳の雪、星川の螢、湯川原の鈴蟲のごときは、此の地の十景の内にかぞへられてある。いづれも浴客の旅情を慰むるに足る。

(上野より田中へ百四十哩、豊野へ百四十哩)

○芙蓉湖

一に野尻湖とも云ふ。信濃下水内郡の北端、北國街道の東にある。

別所温泉 湯田中と澁の温泉 芙蓉湖



東山道西部地方

東西三十町、南北十一町、周回三里十七町、其の形、瓢のごとく、湖中に一の小島が横たはつて居る。之れを辨天島と稱へる。長橋を架して、賽路に當て、ある。翠巒は、湖の周圍をめぐり、影を倒に水面に映して、風色絶佳の處である。信越線柏原驛より一里ばかりにして達することが出来る。

(上野より百五十二哩)

○赤倉温泉

信越線田口驛より西の方、約一里にある。地は、越後中頸城郡妙高村にして、後に妙高山を負ひ、左に黒姫山、右に鉦山を望み、北方は、遠く開けて、北海に走つて居る。白帆點々として往來するのが見える。實に絶勝の温泉場である。泉源は、赤倉山の麓から湧出し、

麓もて五ヶ所の浴槽に引いてある。温度は、華氏百三十度、宏大な浴室がある。閑静なると、好風景なるとは、此の地の特色として數へる。

(上野より百六十二哩)

九 東山道東部地方

○妙義山

妙義山へ登らんには、信越線松井田驛より三十八町にして、妙義町に至る。此の間は、路平坦なれば、人力車を通ずることが出来る。これから先は、坂路崎嶇として、車は通らぬ。此の山は、白雲、金洞、金鶏の三峰からなるもので、いづれも巍峨たる岩石より成りて、

赤倉温泉妙義山



峰々突兀として、鋒を立てたやうである。満山古松老楓多く、四時の風色捨てがたきもの、内にも、紅葉、満山を燃やすがごとく頃が、最も佳と云はねばならぬ。妙義町より六七町を登れば、日本武尊を祀つてある妙義神社がある。社殿は、丹朱を以て塗り、四面に岩石を廻らし、樹木繁茂して、頗る幽邃の境である。其の横手から左折して坂路を登り、十餘町にして、中の岳一の鳥居に達する。即ち金洞山である。これから尙ほ登ること七八町にして第一石門の碧空に聳ゆるが見える。其の高さは、幾何なるか、測られぬほど高い。是は、一大奇岩の中心たる洞穴ありて、關門となりしものである。之れより坂路は、ますます、峻峻を極め、一步一喘、數町にして第二石門

に達する。鐵鎖を手繰りて、其の下に達することが出来る。極めて峻峻となりて、とても攀登することが出来ないから、いづれも之れより上へは登らぬ。これより別路二十餘町を下れば、奥の院社務所がある。其の傍に尖岩の突兀として峙立し、其の頂上には、白幣を祭つてある。とても登れないが、鐵鎖を手繰り、鐵の梯子を攀ちて、辛うじて登れるやうになつて居る。其の全山の奇勝は、中々に盡されぬ。

(上野より七十三哩)

國分青崖の白雲山の詩に、

昔雲白雲寺。今到青山祠。青山不可極。白雲飛何之。



東山道東部地方

二七六

冉冉暮鐘出。嗷嗷暝猿悲。願迫白雲去。青山歌紫日。

白雲千萬峰。峰々皆白雲。雲來樹窈窕。雲去山氤氳。

金洞薜蘿古。石門猿猴群。夜臥白雲上。髣髴天難聞。

○霧積溫泉

信越線横川驛から西北二里半の山路をふみて達する。霧積谷の上流なる溪谷の間に湧出し、各浴舎には、篋を用ひて、導いてある。鹽類泉にして無色透明である。地は、海拔二千八百尺の高處にありて、霧積川の清流に臨み、四境は、老樹蒼鬱として、一點の山骨をだに認むることが出来ぬ。多くは楓樹にして、他の樹木は、極めて少ないから、晩秋錦を織り成せる頃に至れば、其の風光は得も言はれぬ。

附近には、多くの瀑布がある。夏涼しく避暑に好適地である。八栗山、鞍掛山、遊仙峽など、見るべきところがある。

(上野より八十哩)

○赤城山

前橋市の北方、約二里のところにある一の鳥居を潜りて四里ばかりを登るときは、海拔六千三百尺の赤城神社に達するのである。社頭には、老樹矗立して、晝なほ晦く、人をして自から敬虔の念を深うせしむるものがある。彼の俊傑雲井龍雄の詩に、

鼎倉何憂五鼎烹。誰圖好向八州成。中原從是知多事。

立馬湖山是赤城。

霧積溫泉 赤城山

二七七



とある。

○榛名山

上毛三山の一にして、榛名富士の名がある。榛名湖及び榛名神社は、此の山中にある。萬葉集に所謂伊香保沼なるものは、此の湖水である。其の下流は、伊香保川となつて、吾嬬川に入る。榛名神社は、東南に面して、榛名山南の中腹にある。元湯彦命を祭れる縣社で、石階曲折双龍門は、其中壇にある。彫刻の妙、見るべきものがある。背後に瓊鋒の巖と云ふがある。神體は、此の巖窟内にあつて、鎮座し居られる。額堂の前には、一基の鐵燈籠があつて、左近衛中將新田義貞奉納との標札が掲げられてある。實に古色蒼然掬すべき

(上野より前橋へ六十九哩)

ものである。それより更に石階を降ること數十弓にして、一の清流があり、之れに朱塗の橋を架けてある。これを稱して、神橋と云ふ。榛名湖は、榛名山中にありて、周圍一里、水光一碧、山影の倒映するところ、宛然東海の濱に芙蓉峰を望むがごとき感不起さずには居られぬ。

(同上)

○伊香保

伊香保へは、高崎から電車の便がある。途中澁川より一里ばかりの所に、御影の松と云ふのがある。これは、明治十二年、英照皇太后の伊香保へ行啓あらせたまひしとき、御野立のあつたところである。今は、電車が通ずるが、近年までは、交通機關としては、澁川まで、



東山道東部地方

鐵道馬車のあるのみで、それから多くは徒歩であつた。其の間は、二里ばかりもある。此に一の碑の立てられて、碑面に、芝中の松の宿りに千代かけて、

残るは君が御かげなりけり。

と詠まれたる萬里小路博房卿の和歌を鐫してある。伊香保は、山の半腹を拓きて、家を構へてあるので、層々相重なりて居るやうである。温泉の湧出するは、南の方八町の溪間にありて、樋を地中に伏せて、旅館に引いてある。純然たる炭酸泉にして、諸病に効がある。此の地は、榛名山の中腹に位するから、暑氣を知らぬ仙境である。故に都人士の夏季、此に來浴するものは、頗る多く、一ヶ年の浴客

は、約四萬に達するとのことである。如何に其の盛なるか推知せられる。關雪江が、

靈湯沸出白山巔。家位菅巖秀簞邊。一道槽通諸室裡。方爲五十六條泉。

とある。此に至らんには。前橋より六里、高崎より七里、にして、いづれも電車の便がある。

今伊香保附近の勝地を紹介せんに、其の東南にある小山を物聞山と云ふ。こゝに登臨せば、伊香保の市街を眼下に望むべく、眺望甚だ絶佳である。松尾山は、高崎街道の路傍にある一の山にして、其の東北面には、船尾の瀧と云ふのがある。直下二十丈で、頗る壯觀で



東山道東部地方

二八二

ある。二つ岳の蒸風呂と云ふのは、南二十四五町にありて、山麓より蒸氣の噴出するがある。其の温度は、華氏百十度乃至百三十度にして、此に屋根を掩ひ、四方は密閉して、身體を蒸すことに設備してある。箕輪の城址は、船尾山の南、東明屋村にある。大元中、野信業の築いたもので、永祿四年、武田氏に亡されたのである。

○澤渡温泉

澁川より伊香保道と別るゝもので、此の間五里半は、鐵道馬車の便がある。それより二里を経て、達せられる。若し伊香保から此に至らんとせば、加賀摩利山の北方を越え、五町田に到るを近路とするのである。海拔二千三百尺、盛暑といへども、華氏の八十度を昇つ

たことはない。

(上野より高崎へ六十三哩)

○四萬温泉

上野吾妻郡澤田村の北端にあつて、山口、荒、日向尾の三つから成る。泉質は、鹽類泉にして、皮膚病などに特効がある。山に對し、水に臨んで、眺望開豁、近年一年の浴客は、一萬人を下らぬところである。

(同上)

○草津温泉

上野吾妻郡草津町にある温泉にして、土地僻在して居るので、浴客は、多くないが、東京より行くには、信州に入りて迂回するか、又は、横川驛より山路を進むのである。地は、海拔四千五百尺の高處

澤澤渡温泉 四萬温泉 草津温泉

二八三



東山道東部地方

にありて、盛夏の候といへども、八十度を昇らず。蚊なく、毒蟲なく、清爽の氣、肌に迫りて、實に人界と隔絶して居るの感がある。避暑の別天地と云ふべく。西には、白根の硫黄山を仰ぎ、東南は、曠漠たる山野を隔て、吾孀山、浦倉山などの峻峰を眺むべく、風光は、極めて絶佳である。

此のところ四季といふことなかりけり。

とは、古人誰やらの句であるが、實に夏を抜きにしたところなど面白。

○多胡の碑

上州多野郡吉井町にありて、新町驛より三里二十二丁、我が國三碑

の一として、又上野三碑の一として、其の名が、治く世に知られて居る。今より一千二百年前、元明天皇、和銅四年に建設したるものにして、下野の那須國道の碑に後ること二十餘年、又陸前多賀城の碑に先き立つこと五十二年の古碑である。高さ四尺一寸、幅上部一尺六寸、下部二尺餘、碑面に八十字を勒してある。

(上野より新町へ五十六哩)

○山上の碑

上野三碑の一にして、倉が野驛より二十町にある。八幡村大字山名にありて、山名八幡宮の背後に登ること十餘町の所にある。碑は、高さ、三尺、幅一尺一寸、碑面には、

多胡の碑 山上の碑



辛巳歲集月三日佐野三家是賜健守命孫黑賣刀自此新川臣兒斯多

彌英院孫大兒臣聚三兒長利僧母爲記定友也放光寺僧。

の五十二字を勒してある。三碑考には、此の辛巳の年を白鳳元年のこととし、多胡の碑よりも古いと考證してある。碑面は雨露に曝されて、殆ど銷滅してある。

(上野より六十哩)

○今井澤の碑

前記山上の碑より登ること、約五町ばかり、それより十餘町の峰ついききを傳ひ、荆棘の間を降れば、碑の前に出る。其の形狀、大さは、山上の碑と、略同じきものである。是は、神龜年間の建設で、白鳳よりは、五十年ばかり後である。

(同上)

○神無川

此の川は、武藏、上野の國境を流る、清流にして、勅使河原の北にて、烏川に合流する。其の山間、溪谷にありて、水勢矢のごとく、奇石怪岩に激し、珠を碎き、雪を散ずるの状は、實に一の奇勝として、世に聞えて居る。此處より出づる三波石と云ふは、庭園家の頗る賞玩するところである。新町驛より遠くはない。

(上野より五十六哩)

○佐野の渡

群馬縣佐野町にある。高崎驛よりは二十餘町、高崎より烏川を経て、山名、藤岡に到るの通路である。此地、古來佐野の渡となへて、

今井澤の碑 神無川 佐野の渡



東山道東部地方  
二八八  
佐野源左衛門常世の貶せられたる地である。謠曲鉢の木に依りて、  
傳説したるものであらう。

○高山神社

上野の太田町にある金山の麓、天神山に祭つてある。祭神は、高山  
正之である。明治十一年三月の創建にして、境内森嚴、自から此の  
偉人を咫尺の間に髣髴するの感がある。

我を我とおぼし召すかやすめらぎの、

君のみこゑのかゝるうれしさ。

とは、正之の詠である。東武線太田町にて下車すればよい。

(淺草より五十六哩)

○大谷観音

宇都宮市から西北五十餘町にある。城山大字荒計にありて、坂東十  
九番の靈場に數へられて居る。僧空海の彫刻にかゝる岩窟中にある  
觀世音を安置したので。山は、さまで高くはないが、満山は、岩石  
より成りて、奇勝とするに足る。宇都宮より山麓までは、輕便鐵道  
の布設せられてあるから、一時間を出でずして、達する。

(上野より宇都宮へ六十五哩)

○日光廟

日光を見ねば、結構と言ふなどの銘打つたる靈場であることは、世  
の沿く知るところである。神橋は、日光の入口なる大谷川に架した

高山神社 大谷観音 日光廟



る總朱塗の橋にて、長さ十四間、幅三間、擬寶珠に鍍金の金物を用ひてある。平常は、橋の袂に柵を設けて、通行を禁止、其の右の假橋を渡らしめる様にしてある。これを渡れば、老杉の亭々たる路を上り、數百歩にして小門を入つたならば、正面に石の鳥居がある。すべて御影石にて造る。高さ二丈七尺、これから表門に至れば、はや其の結構の見初めにして、丹朱を施し、極彩色を用ひ、左右に鍍金したる唐獅子を置いてある。其の兩側の石垣は、巨大なる石にてたゞみたるもので、其の最大なるものは、一丈三尺に二丈もあるものである。表門を入りて、數百歩にして、陽明門を見るのである。此の門は、一に日暮し門と云つて、其の丹青の巧妙、精細なるは、

見るものをして、日の傾くを忘れしむると云ふよりの名である。これより内部の裝飾は、特に當時の名手の手に成れるものゝみで、悪からうはづはない。かくて唐門に至る。唐門は、すべて唐木造りにして、其の彫刻の巧緻なること、唯、驚歎するのみである。此處を入れば、拜殿である。承屋の上には、土佐將監の筆に成れる三十六歌仙の額を掲げ、天井には、蟠龍を畫き、柱は、總金塗にして、唐戸は、金蔴繪である。拜殿と石の間との間には、四基の柱ありて、いづれも、堆朱にして一基の價、當時八萬兩を要したとのことである。これより續いて本殿がある。其の結構、善盡し、美盡し、能く斯く出来たかを思はれない。五畿八道八十州はさて置き、新領土の



朝鮮に至るも、之れに及ぶものは絶えて無いことは、斷言して憚らぬ。唐門を出で、左に路を取れば、東照宮の廟、即ち奥の院に至るのである。其の入口の門には、眠猫の彫刻がある。左甚五郎の作といひつたへて居る。これより石階を登ること二百餘級、廟は、玉垣を繞らし、中央に唐銅の大寶塔がある。兔に角二百五十餘年の泰平を開きたる英雄家康は、實に長に此の下に眠つて居る。此の附近には、勝地は、少なからぬのであるから、頂を別けて、聊か紹介しやう。

(上野より九十哩餘)

○二荒山神社

東照宮の表門より右折し、直ちに其の社前に達する。本社は、昔より

り此の山に鎮座ましましたる神にて、東照宮の地主神である。後にこれを音讀して、『にくわうざん』と稱へたので、中古日光の文字をあてはめたのであると云ふ。

○日光山の瀑布

日光山の山中には、瀑布と名のつくものが、頗る多い。其の最も著名なるものは、裏見の瀧、霧降瀧、及び華嚴の瀧であらう。裏見の瀧は、日光廟の西南一里半ばかりでありて、神橋より大谷川に沿ふて登り、中禪寺道より左折し、二十五町ばかりで達するのである。飛瀑は、奇岩の七八間ばかり突出したる所から直下するものであるから、其の水と岸壁との間は、空所となつて居る。こゝから其の瀧



をみるので、此の名がある。其の傍に二つの小瀑布がある。相生の瀧、白糸の瀧となへて居る。

霧降の瀧は、裏見の瀧とは、正反對の方面にある。即ち神橋より右折して、一里半を登れば、山頂平坦の所に達する。これより數町を降るときは、其の瀧の對岸に達することが出来る。高さ三百餘尺、幅三十餘尺。水聲はげしく耳を聳するばかりである。其の傍には、楓樹が多いので、晩秋錦を曝する候に至れば、一段の景致を添へることゝなる。

華嚴の瀧は、中禪寺湖よりの落口に懸つてあつて、大谷川の水源である。日光町より中禪寺道をたどり、嶮峻なる坂路を上下し、三

又訥庵の句に、

巖頭の感やいかにと瀧の音。

里弱にして達する。斷崖直下四百餘尺、幅五十尺ばかり、瀧と相對せる懸崖の中腹に小屋を設けて、觀瀑の便に供してある。されど上部の半を見るのみで、其の全體を見ることは出来ぬ。岩燕と云へる一種の小禽が水煙を破りて高く翱翔する其の状は、豪壯とやいはるか、奇絶とやいはるか。其の雄大は、那智の瀧を凌駕すといふも、蓋し誣言ではなからう。三島中州が詩に、

絶壁千尋走自蚪。神驚目眩足難留。晃山七十餘名瀑。



○中禪寺湖

華嚴の瀧より登ること八九町にして到るのである。神橋より此に至るは、四里ばかりある。今は、中宮祠となへ、二荒山の神を祭つてある。湖は、東西三里、南北一里餘、黒髮山以下の諸山、湖の周圍を繞りて、これを擁し、山の色、水の光、共に一様の翠を凝らす。山水明媚の地とは、是等をやいふのであらうか。水甚だ清冽にして、古來魚蟲を生ぜずと言ひ傳へたが、近來魚族の繁殖法を行ふてから、鯉、鱒、鮒などの鮮美に同じからぬやうになつた。往年明治天皇の此に巡幸ましくして、名を幸の湖と賜はつた。湖畔には、旅亭ありて、避暑の客、三伏の熱を避けて、此に來遊するものが多い。日光

山の巡遊は、通常中禪寺湖を以て、最終とするが、更に健脚の人ならんには、湯元まで進むも面白からう。

亂泉聲裡片雲飛。纔到山嶺澹夕暉。倏忽傾盆天潑墨。

太湖高閣共依微。

とは、よく中禪寺湖の如何を説き得たるものである。

○日光湯湖

中禪寺湖より登ること三里ばかり。二人曳の腕車ならば通ずることが出来る。乗馬、駕籠いづれも、望に従ふて得られる。此の地は、海拔四千餘尺、盛夏の候といへども、日中は八十度を出でず、朝夕は、七十度内外である。温泉の湯口は、十ヶ所ばかりある。前は、



東山道東部地方

二九八

湯の湖に臨み、後は、白根山、温泉が岳を負い、風光清絶である。舟を湯の湖に浮べて、網を投すべく、釣をなすことを得べく、消閑には、極めて妙である。温泉宿は、十餘軒ある。誰やらの詠に  
さかしまにうつる景色のすいしくも、

湖のそこにもたかき山かげ。

○男體山

湯の湖より更に登るものにして、道路極めて峻険、とても立ちて歩することの出来ない所がある。此の山、本名は、二荒山といつて、其の絶頂に二荒山の神を祭つてある。海拔八千二百尺、盛夏の外は、登山を禁じてある。山巔より眺望すれば、富岳は、獨り西南に聳え、

赤城、榛名、妙義、筑波の諸峰のごときは、脚下に望み、其の高きを認むることが出来ぬ。其の神秀なることは、到底筆舌の盡すところでない。

我がたけは富士といづれか高からう。

とは、誰やらの句であるが、真に其のごとくで、富士と對等の高さに思はるゝから、自分の長も、いづれか高からうかとの疑が起る。

○羽黒山

下野の國にありて名山である。山上に羽黒神社を祭つてある。羽後の羽黒神社にかたどりたるもので、三月十月の大祭には、賽客絡繹として群集する。山は、突元として鬼怒川に臨み、那須、日光其の

男體山 羽黒山

二九九



東山道東部地方

三〇〇

他武相の諸峰を始め、遠く芙蓉峰を望み、風色明媚の一勝區である。加ふるに夏期は、鬼怒川に鮎を漁することが出来、秋は、松露、松茸を狩ることも出来るので、遠く此に來りて、清遊を試むるものも少なくない。東北線岡本驛から、程遠からぬところである。

(上野より六十九哩)

○鹽原温泉

西那須野驛より殆ど六里の所に鹽原温泉がある。關屋村よりは、山にかゝるもので、箒川の清流に沿ふて、崎嶇羊腸、十餘町にして見返り橋と云ふがある。其の懸崖に見返りの瀧がある。路は、登るに従つて、景色は、一步ごとに新になる。關屋より一里半にして、大

網に達する。即ち鹽原の入口である。此處には、一つの温泉宿がある。これより路を返して、寒冷橋を渡り、隧道を潜りぬけ、十餘町にして福渡戸に至る。十餘戸の温泉宿がある。いづれも三層五層の高閣にして、中には箒川の岸に臨めるもありて、終日終夜、淙々の音、耳を離れぬ。仙寰とは、斯る所のことかとも思はれる。各旅亭の間、互に、篋を用ひて、温泉を引てある。就中等川の岸より湧出するものゝごときは、實に奇觀である。これより五町ばかりを隔て、天狗岩に達する。路傍に屹然として、天を摩する巨岩である。其の左方に野立石と云ふがある。高さ二丈ばかり、其の面平坦にして、一百人を立たしむるに足る。此の邊ことごとく満目の奇

鹽原温泉

三〇一



岩にして、脚下には雪を飛ばし、珠を砕くやうな急湍の岸を嚙むが  
 ありに、奇絶快絶、名状の出来ないほどである。これより畑下戸に  
 到れば、數戸の温泉宿がある。鹽原の中心とも云ふべきは、門前と  
 云ふところにして、十數戸の温泉宿がある。その他、古町、鹽の湯  
 などの温泉がある。鹽の湯より谷に沿ひ下るときは、雷霆、霹靂、  
 咆哮の三瀑布がある。門前の南八町に須卷の温泉がある。古町より  
 西の方三里に新湯がある。  
 此の地は、斯くのごとく温泉の多いばかりではなく、楓樹の多けれ  
 ば、晩秋錦繡を曝すの頃に至らば、満山燃ゆるがごとく、實に絶勝  
 といはねばならぬ。夏時は、避暑の客の雜沓すること、實に甚だし

いので、此の地の風光を稱する人は、春秋のいづれか、最も宜し  
 からうと思はれる。  
 (上野り九十二哩)

○那須温泉

那須に到らんには、黒磯に下車して、順路を経ればよいのである。  
 乗合馬車もあれば、人力車もある。此の温泉は、那須が岳の周圍に  
 ありて、夙に七湯の名がある。即ち湯本、高雄股、辨天、大丸、三  
 戸小屋、坂室は、是れである。  
 那須が岳は、茶臼山最も高く、海拔六千四百尺、噴火山にして、常  
 に黒煙を噴いて居る。七湯の内、最も近きは湯本にして、黒磯より  
 四里半ばかり、馬車ならば、二時間半にて達せられる。温泉宿は、

那須温泉



八九軒ある。泉質は、酸性泉にして無色透明であるが、硫黄の氣を帯びて、強酸鐵性味がある。温泉に浸したる手拭を日光に曝すときは、ポツ／＼に裂けることがあるから、乾すには蔭に置いてせねばならぬ。

湯本から十二町にして、高雄股の温泉がある。其の北、三十丁に辨天の湯がある。其の東方十八町に北温泉と云ふがある。これより峻坂を登ること十四五町にして、大丸温泉に達する。温泉極めて強く、手を浸すことの出来ないほどである。これより更に一里三十餘町を登るときは、三戸小屋の温泉に到るのである。此に到る道路は、茶臼岳の北面中腹を縫ふて、登つて行くのであるから、途中噴火の轟

々たる狀を仰視することが出来る。其の凄まじきこと例へられぬ。此の原質は、多量の硫氣を含めるものにて、華氏百二十度の温度を有し、湯本と其の効能が同じことである。これより四里、湯本より三里にして、板室に到ることが出来る。此處より黒磯までは、五里の路程である。

古來有名なる那須の殺生石は湯本にある。

飛ぶものは雲ばかりなり石の上。

と云ふ芭蕉の句碑がある。

蒲生秀郷が、こゝに遊びたるとき、

世の中にわれは何とかなすの原、

那須温泉



との一首を遺されてある。

○國造の碑

黒磯より五里餘、湯津上村の原中にある。俗にこれを笠石となへる。其の形、扁石をくぼめて、笠のごとくになりて、碑の上にある。天武天皇の庚子の年に建てたもので、日本の三碑中にありて、最古のものである。高さ四尺ばかり、正面は、砥のごとくに磨き、其の外は、すべて自然石である。碑面は、百五十三字の漢字を勒してある。天和の初年までは、蔓草荆棘の中に埋没して、これを知るものがなかつたが、水戸光圀、此の事を聞きて、これを捜して鑑せしめ、

(上野より百四哩)

なすわざもなく年やへぬべき。

元祿四年、其の上へ寶形づくりの堂を建てしめられた。(同上)

○黒田原温泉

前記那須七湯の一なる大丸、朝日の二泉より樋を五里の間に伏せて、引きたるもので、停車場の側にある。地は極めて幽邃で、春は、山櫻の谿谷に咲き匂ふがある。秋は、桔梗、女郎花などの霜を見ぬ間の眺もよい。

(上野よ黒田原へ百四哩)

○白河の關の蹟

白河驛より二里半、古關村にある。伊勢の鈴鹿、美濃の不破の關とを併せて、日本の三古關となへられて居る。興平四年、阿倍頼村の建つるところである。能因法師の歌に、

國造の碑 黒田原温泉 白河の關の蹟



東山道東部地方

都をば霞と、もに出でしかど、

秋風ぞ吹く白河の關。

と詠まれたのは、此處である。

此の地は、左右峰巒相連りて、谷をなし、其の中間にせまき山道を通じてある。これは、往古の奥州街道である。其の側に白河神社がある、其の境内に、古の關の跡である。社前に一の碑を建て、寛政十二年、松平定信建之と刻し、表面には、かゝる古跡の年を経ると、もに湮滅せんことを憂ふるの餘、これを建つることの由を勅してある。山河には、白河の清流がある。義經の旗立櫻、家隆の二位殿の松と稱するものがある。

(上野より百十五哩)

齋藤栗堂が詩に、

形勝九泥固。居社控上海。古關蒼鼠竄。老木白雲愁。

平野連京國。群山入奥州。踟躕思往事。駐馬一回顧。

○南湖

白河驛の南方十八町、大沼と云ふところにある一つの湖水である。東西七町、南北三町餘、周回三十一町餘、水が極めて清澄にして、湖畔の風色は、甚で絶景である。松平樂翁、白河に城主たりしとき、湖を浚開し、士民偕樂の園地となし、湖畔に十七勝を撰した。即ち關の湖、興樂亭、鏡山、真萩が浦、錦が岡、常磐の清水、松風の里、月待山、月見浦、千歳堤、御影島、下根島、小鹿山、八聲村、

南湖



東山道東部地方

三一〇

千代の松原、是れである。又別に十六景を撰んである。前者には、ことごとく和歌を付し、後者には、詩を賦して、石に刻して、湖畔に建てゝある。

關の湖かゞみ山、

十七勝と十六景、

今も昔にかはらねば、

集ひ來る人や多からん。

とは、當時の實景である。なほ樂翁の歌に、

湖のこゝとかゞみの山なれや、

心うつさぬ人しなれば。

又詩には、

青松數里抱湖斜。常帶湖風日阪暎。村翁不妨枕頭夢。

穩臥波濤聲裏家。

白河驛にて下車せば順路である。

(同上)

○轉寢の森

白河驛から十八町の所にある。古歌に、

散る花をたゞ一時のゆめと見て、

風におどろくらたゞねの森。

とあるのは、此の處のことである。慶長の頃までは、樹木鬱葱したる森であつたが、今は、田圃に拓かれて、たゞ一の小祠があるのみ

轉寢の森

三一



である。むかし源義家、東征のとき、此處で暫く假寐したので、斯くのごとき名が起つたとのことである。(同上)

○岩瀬の杜

須賀川驛の北十餘町にある。古歌に、

みちのくのおさかの事を人とはい、

いかい磐瀬のもりとこたへん。

とある處で、大職冠藤原鎌足の小祠がある。古來有名なる地區として知られて居るから、こゝに書き記して置く。

(上野より百三十二哩)

○勿來の關の跡

常磐線の關本から十四町のところに平瀨と云ふがある。三方は、山に圍まれて、唯、一方のみが海に面して居る、左方の高處を鷹岡山といつて、八幡神社がある。頗る幽閑である。斷崖幾十仞、白波其の脚を洗ひ、岩窟を嚙んで居る。されど、波浪の穩なるときに至れば、魚族の點々として游泳するを指點することが得られる。山路の傍に、芭蕉翁の句碑がある。

此處目に見ゆるものみな涼し。

とある。これより勿來の關の跡を訪はうとせば、國道によりて、數個の洞門を通過し、山水明媚の間を歩すること、五六町にして、鐵道線路の側に出る。こゝに一の茶亭がある。關の碑の石摺や櫻石な



東山道東部地方

三一四

どを賣つて居る。此の近傍は、すべて一帯に松川浦となへて、風光明媚の勝區で、仙郷ともいふべく。かくて、鐵道線路を踰えて、小徑をたどり、山腹を上ること七八町にして、其の窮る處に古松七八株ある。これが其の關の舊跡で、木柵を以て繞らしてある。其の碑面には、

吹く風を勿來の關とおもへども、

道もせにちる山さくらかな。

千載集に撰び入れられし此義家朝臣の金玉を石ぶみに残すについでに、我腰折をも一首とねもごろにこふにいなびがたくてなむ。

千よろづの仇にむかへる武士も、  
花さそふ風はすべなかりけり。  
文政五年三月十一日しるす、  
正四位加茂縣主 季鷹  
と刻してある。又其の隣の碑に、  
風流のはじめや奥の田植うた。  
といへる芭蕉の句を刻してある。  
歸路もし勿來停車場に出でやうとならば、北に進んだならば、山路一條、路程十七八町、自から達する。

(上野より關本へ百十三哩、勿來へ百十五哩)

勿來の關の蹟

三一五



東山道東部地方

○湯本温泉

常磐線湯本停車場の附近にある。田圃及び人家の附近より湧出し、泉質は、鹽類泉にして鹹味がある。温泉宿は、數十戸あるも、就中大瀧、新瀧などを重なるものとする、昔は三箱山佐波古温泉ととなへた。藻鹽草に、

世と、もに歎かしき身にみちのくの、

佐波古の御湯といはせてしかな。

(上野より百二十七哩)

とあるところである。

○赤井薬師

常磐線平驛から七里ばかり、赤井岳の中腹にある。大同二年、開

基せしものと傳へる。夏秋の候、夜、山上より望めば、洋中より無数の燈火、夏井川を溯りて來集し、最も奇觀を極むる。俗にこれを龍燈と稱し、遠近から來たりて觀るものが、頗る多い。科學上からの解説は、姑く見合して、龍燈として置かう。

○木奴實浦

常磐線久の濱驛から程遠からぬところにある。其の海濱殿神崎から北方二里ばかりの間の總稱である。大小の巉岩は、水際に聳立して、頗る奇觀を極めてゐる。西行法師が、  
あまぞのこぬみが浦にひと夜ねて、  
あすやをがまん波立の寺。

湯本温泉 赤井薬師 木奴實浦



と詠まれたる所で、其の波立薬師は、其の附近にありて、大同年間、徳一大師が、海中より長さ八寸の瑠璃光如来を得て、此の寺を草創したるものである。境内の風光は、實に絶勝である。

(上野より百四十一哩)

○松川浦

常磐線中村の東方一里餘、大江川の川口に位する長汀の總稱なのである。内に十二勝景を撰んである。此の地の風光を賞せんには、中村の途中、松が浦茶店から、小舟を備ひ、海上より奇勝を探りつゝ、水莖山に到り、舟を砂汀に捨て、上陸して一の鳥居を潜り、翠松に蔽はれたる石階數十階を登つたならば、夕顔観音の堂下に出ること

が出来来る。此處は、全勝を一眸の中に收むる最も佳なるところである。更に其の堂の背後から、山頂に登るときは、斷崖數百仞、太平洋の走騰する激浪は、其の下を洗ひ、遠くは碧波一線を劃して、天と連り、鹿島岬より金華山に至るまで、一帶の長汀、塵腸を洗ふに足る。そもく此の勝景は、松島と相伯仲するの間にありて、これを小にしたるに過ぎないが、これまででは、地は、僻にして行旅の便を缺きたるによりて、沿く知られて居ない。されど、鐵道の便の開けたるより、來たりて賞するものが、多くなつた。

波さはぐ島々らかぶ小松島。

十二景とは、松川浦、水莖山、飛鳥の湊、松沼の濱、離れ崎、川添



東山道東部地方  
三二〇  
の森、文字島、紅葉園、沖が島、梅川、鶴巢野、長瀬の磯である。

(上野より百九十三哩)

○東山温泉

若松驛より二十餘町、湯本村にあつて、古來有名なる温泉である。もとは天寧寺温泉となへた。湯川の清流は、村の中央を環流して、所々に懸泉の迸るがある。山光水色實に明媚の一勝區と云ふべきである。温泉は、羽黒山の麓、湯川の沿岸より湧出し、鹽類泉で無色透明、臭氣がないが、唯、僅に鹹味を帶ぶるのみである。湯川の流域に伏見の瀧、不動の瀧、姥の瀧、銚子の口、雨降の瀧、原が瀧などがある。

(上野より百七十八哩)

○安積沼

地は、岩代にありて、日和田の西なる東勝寺の背後にある。其の地は廣袤二町ばかり、古來有名の地區であつたが、今は、水涸れて、水田と云つて居る。されど、其の沼の跡たることは、確に認め得られる。孝兼の、

あやめ草ひくてもたゆき長き根の、

いかで安積の沼に生えけん。

又後鳥羽院の、

さらわけし淺香の沼の花がつみ、

かつ見る夢や明るほどなき。

東山温泉 安積沼



東山道東部地方

三三二

○安積山

一に額取山とも云ふ。山の井村にある。山容は、一の圓丘のごとく、  
嶺上に一二の古松がある。山頂に登るときは、近郷ことごとく雙眸  
に集る。古來有名の勝區として持てはやされて居た。九條内大臣の、  
末とほき淺香の山の峯に生る、

松には風も常磐なるらん。

とあるは、山の所である。上記の安積沼ととも、日和田驛で下車  
せば、遠くはない。  
(上野より百八十一哩)

○山の井

古來有名の舊跡である。安積山の西の麓、片平村にある。大和物語

に依れば、「昔、大納言の娘、容姿艶麗なりしかば、その舍人、これ  
を垣間見て、愛戀の情に堪へやらず、遂にこれを奪ふて、奥州淺香  
山に至り、こゝに小庵を結びて同棲したりしが、數年の後、其の娘  
孕めるなり。時に舍人、他に出で、歸り來らざりしが、娘は、待  
ちわび、此の山の井に、わが姿をうつし見たるに、その變り果てし  
姿におどろき、且つ悲み、

淺香山かけさへ見ゆる山の井の、

あさき心をわれ思はなくに。

との歌をのこして、庵室に死せり。後舍人かへり來りてこれを見、  
悲歎に堪へずして、其のかたはらに死せるとかや、然れども采女の

安積山 山の井

三三三



東山道東部地方  
歌に、

あさか山かげさへ見ゆる山の井の、

浅き心をわれ思はなくに。

とありて、其の格調も、略相似たり。恐くは旅人の附會せしものな  
らんかとある。

(同上)

○三雄山

母形峙の東麓にありて、杉田村に屬して居る。満山は、奇岩怪石の  
矗立せるがある。其の間には、古松蟠龍のごとく、匍匐するものは、  
蜿蜒として蛇のごとく、老楓の風に揉まれて、奇状を呈せるなど、  
頗る風致に富んで居る。深溪これを廻りて、清水滔々として落る。

山水の勝深邃にして静雅、霜葉の錦を織り成すの候にも至れば、其  
の勝景は、幾層を増すであらうと思はれる。本宮驛から約一里二十  
餘町のところにある。

(上野より百四十八哩)

○安達が原の舊蹟

二本松驛の東方十七町ばかりにある。阿武隈川の岸にあつて、安達  
が原の黒塚の古蹟があるといひ傳へて居る。二本松の市街を離れて、  
阿武隈川を渉り、數町を歩めば、此に至るのである。數戸の民家は、  
散在して居る。其の背後に巨岩を積みかさねて、岩下に土窟の様を  
なすものがある。是れ昔鬼の棲息したるところと言ひつたへて居る。  
又享保の頃、此の岩に三十三體の觀音像を刻み、六字の名號等を彫

三雄山 安達が原の舊蹟



りつけたものがある。其の側に、

みちのくのあだちが原の黒塚に、

鬼こもれりといふは誠か。

といへる平兼盛の和歌を勸したる碑を建て、ある。其の背後には、  
いかにも荒れ果てた古刹がある。此の寺には、鬼の用ひたと謂へら  
れて居る鬼の飯焚鍋、人斬庖丁などといふものがある。もとより信  
を措くべきものではないが、たゞ傳説として記して置く。

○信夫公園

福島市街の北端にありて、停車場より十六七町。坂路は、南より廣  
曲して通じ、其の頂上に至れば、平坦である。高崖に接して、掛茶

屋が、軒を並べ、北隅には、招魂社黒沼神社がある。桃もある、櫻  
もある。楓もある。春秋の頃、此當に來たり遊ぶものが、少なくな  
い。仰げば吾妻山の白煙を噴けるを見るべく、俯して阿武隈の水流  
を望むべく、風光絶佳の勝地である。(上野より百六十八哩)

○椿館

此の館址は、信夫公園の附近にある。一に茶白館ともいふ。天正の  
頃、伊達成實の築いた城跡がある。其の西の小橋を囁橋といふの  
である。古歌に、

みちのくのさゝやきの橋なかたへて、

文だに今はかよはざりけり。



とあるは、此處のことである。

(同上)

東山道東部地方

三二八

○文字摺石

福島の東方、阿武隈川を隔て、一里ばかり、岡山村大字山口なる觀音寺の境内にある。石の高さ一丈二尺、幅六尺九寸、地上にあらはれたる部分は、南方は、一尺七寸、北方は、六尺二寸ある。中古此の石の上に、季候にしたがひて、其の花を載せ、其の上にて布を摺り、之れを朝貢せしことがある。其の花模様のもちれて印するからもちずり石と云ふのである。碑ありて、河原左大臣の和歌を鐫してある。

みちのくのしのぶもちずり誰ゆえに、

とある。後人布に葱草を印して、しのぶ摺となへ、これを販賣するに至つた。

(同上)

○高湯温泉

福島驛から五里ばかり、吾妻岳の中腹に位せる庭坂村にある。海拔二千三百尺。東北西の三面は、翠巒これを圍み、南方のみ開けて、信夫全部を脚下に瞰望し、氣清く、風靜にして、避暑には好適の地である。

(同上)

一〇 奥羽地方

文字摺石 高湯温泉

三二九



○千歳公園と千歳山公園

千歳公園は、山形市の東北宮町にある。もとは、柏山寺の境内であつたが、今は、公園となつて居る。東に馬見が崎川の清流を擁し、大小數個の堤防を設けて數町に満亘し、南北に連亘する丘陵がある。園内は、古松翁鬱として、老杉は、之れに交り、蒼翠掬すべきものがある。茶亭もある、亭樹もある。就いて憩ふことが出来る。春夏の候は、殊に賑はふ。

千歳山公園は、どうかすると一字の多暮で、同一のものとする人多いやうであるが、全く違ふ。山形市を去ること、東の方一里餘の所にある。園の南、十餘町のところに高丘がある。これを千歳山と

名づけてある。山容は恰も倒扇のごとく、翠松は、頭髮のごとく密生して被ふて居る。眺望絶佳で、山形に接近しておるので、來たり遊ぶものは、少くない。園内熊野社の前に阿古耶の松といふのがある。これは故事來歴を持つた樹であるが、今は、枯稿して唯其の樹根のみが残つて居る。(上野より二百二十二哩)

○飯坂温泉

長岡驛から一里ばかりの處にある。土地高燥にして、北は、摺上川の懸崖に接し、東北に愛宕山を望み、西北には、鵬の城址ありと傳へて居る大作山を望み、眺望頗る開豁である。町の中央から、對岸の湯野村へ一橋を架して居る。これを十綱橋と稱へる。兩崖は、高



きを以て、西洋風の釣橋となしてある。橋上に佇立せば、奇岩怪石に觸るゝところの清流は、珠を碎き、雪を飛ばし、怒濤の音、遠雷のごとく、風致の大に愛すべきを見るであらう。此の邊の家屋は、いづれも高崖に添ふて、建設せられてあるから、道路より見るときは、平家と異なるところがないうやうである。されど、十綱橋より其の裏面を窺ふときは、三層若くは四層となつて居る。故に普通の家屋とは、全く反對で、入口は、四階ならば、それより三階に降り、更に二階に降り、終に階下の室に至るのである。最下の室は、川に臨み、急湍時に或ひは室に迸ることなきにしもあらず。全町八百餘戸、内三十餘戸は、温泉旅館である。泉源の重なるものは、町の

中央には、鯖湖の湯、透達の湯、波古湯がある。いづれも弱性の藍類泉である。鯖湖の湯は、日本武尊東征のとき、これに浴せられたとのことで、其の発見は、最も古い。十綱橋を渡つた對岸に湯の村の温泉がある。泉質は、前と同一である。此の町盡處から、摺上川の川原に下り、懸崖の下を潜りて進まば、穴原の温泉に至る。路程は十四五町ありて、途中に屏風岩、天狗岩などの奇觀がある。山光水色二つながら愛すべきの地である。浴後の運動には、好適である。

(上野より百七十三哩)

○靈山

桑折より東方三里半の所において、北畠顯家の城址がある。四方は、



斷崖絶壁、高さ數百仞、山上に怪岩の聳つもの甚だ多い。往時は、伽藍、僧坊多く、所々に散在したるが、南北朝のとき、顯家、義良親王を此の地に奉せしよりして、足利氏のために、しばしば攻められて、臺塔伽藍は、多くは烏有に歸した。此の山、古は、不忘山と呼ばんで、弘法大師が、此に登りて、靈山と改めたのである。大師學問所の跡、稚兒が岳、神樂岩、及び護摩壇の跡などは、最も見るべきであらう。山頂に登れば、東は、相馬の海邊から、北は、金華山沖を望み、千里の風光、一眸に集るとも云はうか。城址から四五町の所に靈山神社がある。北畠親房、顯家、顯信、守親の四卿を祭て、明治十五年の創建にかゝる別格官幣社である。

(上野より百七十六哩)

忠と義が千古をてらす靈山の、  
 峰よりたかし北畠殿の  
 とは、或る小學生が詠んだ三十一文字だといふことが、何かの書で見たことを確に記憶して居る。

○有耶無耶の關

岩代、羽前の國境なる川崎村大字今宿の西にある。東鑑に、文治五年八月十五日、大木戸の戦やぶれて、主將國衡、大關山を踰えて、出羽に赴かんとす、云々とある、其の古跡は、此の處である。其の頂上に大悲閣を安置してある。往時稱するところの、關山無耶の觀



奥羽地方

三三六

音とは、即ち是れである。其の側に東往山仙住寺と云ふ寺がある。境内の景致は、實に奇絶と云はるか、稀に見るところの風光である。土御門天皇の御製に、

たのみ來し人の心もかはるやと、

問ふても見ばや有耶無耶の關。

と詠まれたまふたのは、此の地である。(上野より大河原へ百九十七哩)

斗藏山

斗藏山は、一に安孤山とも云ふ。岩城伊具郡矢間村大字小田にある。坂路十三四町を登れば、堂宇のあるところに到るのである。其の路傍には、奇岩の突兀として峙立するものになると、溪流の潺緩と流れ

て、岩に激しては、飛雪のごとく、老杉幾千株、蒼翠天を蔽ひて、夏なほ寒いほどである。更に山頂に至れば、吾妻山の白雪は、天に棚曳けるがごとく、阿武隈川は、東を流れて、素練を曳くがごとく、風光實に得がたい趣がある。此處に到らんに、槻木驛から、鐵道馬車の便によりて、角田に達する。又常磐線に依るときは、磐城の吉田驛にて下車し、亘理山を踰え、阿武隈川を渡り、二里にして、彼の角田に達する。角田よりは一里弱にして斗藏山に到るものである。

(上野より槻木山へ二百二哩、吉田へ二百六哩)

千貫松

岩沼驛の西南十七八町、千貫村字長谷にある。山頂は、翠松幾萬株

斗藏山 千貫松

三三七



奥羽地方

三三八

山勢の高低に従つて、相連ること、六七十町の長きに亘り、風色實に名状すべからず。遠海よりこれを望むことが出来る。且つ其の山容は、他に紛はしきものがないので、航行の舟子は、これを以て、目標となし、其の價値は、千貫にも換へられぬといふので、山の名を附したのであると云ふ。  
(上野より岩沼へ二百六哩)

○衣笠松

増田驛から三町餘のところ、増田某の門内にある起松にして、明治天皇東巡のとき、叡覽を辱うし、名を衣笠と賜はつたのである。此の時高崎正風は、

たけくまもあねわはかけやゆづるらん

わが大君の衣笠の松

(上野より二百十哩)

と詠まれた。

○榴が岡

仙臺市の東北二十八町にある。舊時數千株の躑躅を栽ゑられたが、今は、僅に其の名を留むるのみである。元祿八年、伊達綱村、此に釋迦堂を建立するに當りて、大に開拓し、單、八重、絲垂などの櫻樹數百千株を植ゑ、且つ騎射馬場、射的場をも設け、士人の遊覽地となし、又松、楓などをも多く植ゑられたので、春陽駘蕩の候、晩秋錦繡を曝すの時に至れば、遊人絡繹として絶ゆることがない。先年此の附近に兵營を置かれたれば、風致を損せられたが、なほ勝

衣笠松 榴が岡

三三九



奥羽地方

地の名は失はない。

みちのくのつゝじが岡のくまつゝら、

つらしと君をけふぞしりぬる。

との歌がある。

(上野より仙臺へ二百十七哩)

○櫻が岡公園

仙臺市の西端、平町三丁目にある。舊藩士の邸宅地であつたが、明治四年、これを開きて、階樂園となし、公園としたのである。地は、青葉城に對し、廣瀬川を帯び、遠く泉が岳を望み、近く茂嶺の綠林に對し、古梅、老松林をなし、清賞餘りあるの勝景である。域内に櫻間神社といふがある。其の傍に入つ房の梅、般若松の古梅老松

がある。これは、朝鮮から齎したものと傳へて居る。(同上)

○宮城野

原の町字南目村より以南、海濱に至る一帯の地の總稱にして、數里に跨り、古の所謂宮城野である。平野茫茫、今なほ昔の面影を存し、萩、桔梗、藤袴、女郎花など、自生して、秋の野の哀をひとしほ深うして居る。加ふるに松虫、鈴虫などの、秋の夕、明月にすだく聲を聞くときは、座に悽愴の感に打たれ、知らずく夜の更くるをも忘れる。又此の地は、小禽の類の多く接息せるが、嘗て禁獵の地となつて居るので、里人は、俗に生巢の原ともとなへて居る。細谷離が、



天竺花迎萬里遊。山河無覽不勝愁。多情最感荒涼色。  
行盡宮城野外秋。

の詩がある。

(同上)

○多賀城址と壺の碑

岩切と鹽竈の兩驛の中間にある路傍にある一の小丘で、方四百餘間  
丘上には、本城の舊址がある。往古東夷に備ふるがために、鎮守府  
を置きたるところで、多賀の國府とも云ふ。壺の碑は、今、小堂を  
其の上に蔽ふて、保存してある。高さ六尺餘、幅二尺六寸餘、往古  
の里程表である。もと陸奥にありて、草莽に埋没したること、約一  
千餘年を経たが、水戸光圀のために發見せられたのである。碑面に

は、

此城神龜元年、按察使鎮守府將軍大野東人之所里也。天平寶字  
元年、參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣獨修造而十二月朔日

とある。聖武天皇のときに當れり。むかしより詠みおける歌枕、多  
く語りつたへてあるが、山崩れ、川落ちて、道あらたまり、石は、  
埋もれて、土にかくれ、木は、老いて若木にかはれば、時移り、世  
變じて、其の跡のたしかならぬことのみを、爰に至りて、うたがひ  
なき千載の紀念となつて居る。(上野より二百二十五哩)

○末の松山

末の松山は、寺を造りて、末松山といふ。松のあひくみな墓ばら

多賀城址と壺の碑 末の松山



奥羽地方

三四四

にてはねをかはし、枝をつらぬる契の末も、終は、かくのごときと、  
悲さもまさりて云々とは、芭蕉翁の奥の細道に物せられたものであ  
る。岩切村の八幡といへるところにありて、翠松幾十株、高丘を蔽  
ふて茂つて居る。丘上に寶國寺と云ふがある。境内は、眺望に富み、  
四時の眺、飽くことを知らぬ。

故郷の人に見せばやしら波の、

聞くより越ゆる末の松山。

とは、藤原清輔の詠めるもの。また寂蓮法師が、  
老の波こえける身こそあはれなれ、

ことしもしまは末の松山。

其の他古歌が中々に多い。

(同上)

○松島

松島は、日本三景の一で、其の勝地たるは、夙に世人の知るところ  
である。東京地方よりするものは、鹽竈にて下車し、それから船行、  
島嶼の間を經めぐり、奇勝を賞しつゝ、行くを最とする。又東奥地方  
よりするものは、松島驛にて下車するが良からう。松島は、六十七  
戸ばかりの村落で、前は一小灣に臨み、東北に丘陵を繞らし、其の  
海岸に旅店ありて、産物を販く家と相並んで居る。  
五大堂は、松島村の東岸に斗出するところの小半島にして、二個の  
小橋を架けてある。島上には、五大堂がある。大同年間、坂上田村

松島

三四五



麻呂、東征に際し、たましく此の地を過ぎり、多聞天の像を安置した。後、慈覺大師、五大明立の像を祭つてから、此の名がある。瑞巖寺は、松島村の北、二町餘の處にある。仁明天皇、承和四年、眞壁平四郎なるもの、創建したるところで、佛殿の正面には、天竺より齋したと傳へて居る正觀音の像を安置し、其の側に伊達政宗が、甲冑をよろひたる像を安置してある。獨眼にして短面、長大なる半月を兜に飾り、手に軍扇を提げたる狀、其の人に接するの思がある。

觀瀾亭は、松島村の西、月見崎にある。伊達政宗かつて豊太閤より伏見殿の一亭を賜はりしを、後、忠宗が、これをそこに移し、更に

修補を加へたものと傳へてある。柱は、柁を用ゐ、雅潔にして廣い。亭よりは近くは楯島、經が島、福浦島、徳浦島、九の島、焼島などを望み、風色絶佳の一境である。

富山は、松島村から、二里弱にありて、地は、手樽村に屬して居る。峻坂を上ること七八町ばかりで、其の頂上に至る。嶺上に大迎寺と大悲閣とがある。一望豁然、數十里の遠きに至るまで、一眸の中に收り、松島灣は、盆水のごとく、奇勝清絶極まりなく、松島の勝景を賞するの絶好の地である。蓋し富山に登つたものでなければ、松島の勝を語るべからずである。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす。



奥羽地方

三四八

とは、曾良の吟である。

浦風や夜さむなるらん松島の、

あまのときやに衣つくなり。

とは、藤原清輔の詠、又伊達正宗の詩に、

今夜待月信吟銘。滄海茫々一氣濃。思見清光佳興荐。

道人緩打五更鐘。

又權大納言實雄の歌に、

松島やあまのもしほ木だれながら、

こりぬ思にたつけぶりかな。

雄島は、松島村の南四五町のところにあつて、竹の浦の東南に當つ

て居る。小松島から渡る路に當つて、渡月橋といふ。座禪堂、松吟

庵、見佛堂などがある。周圍斷崖波浪奔騰、快味言ふべからざる所

である。

鹽竈にある同名の神社は、慶長十二年、政宗の修造したるもので、

社殿の壯麗と境内老樹の鬱葱たるとは、稀に見る景致で、高丘の上

に祭られてある。

鹽竈の浦ふく風にはらはれて、

八十島かけてすめる月影。

とは、藤原清輔の詠である。(上野より二百三十二哩)

○中尊寺金色堂

中尊寺金色堂

三四九



中尊寺は、藤原清衡、勅命を奉じて造營したるもので、當時の建築物は、建武年間、大半焼失し、僅に金色堂及び經藏の二堂のみが、昔のまゝに遺つて居る。金色堂は、方三間の小寺で、外部の四面には、悉く粗布を張り、これに黒漆を塗布し、其の上に金箔を貼り、内部は、鐫柱彫梁、いづれも鏤鈿珠玉を飾り、壇上には、阿彌陀、觀音、多聞天、持國天、六地藏など、十一軀を安置してある。又其の壇下には、清衡、秀衡、基衡の棺を納め、秀衡の季子、忠衡の首桶を藏して居る。里人は、これを稱して光堂といふ。一千餘年の久しきを経たる建物として、古色蒼然として、間々金色の光の僅に昔しの餘をとめてあるばかりである。正應元年、鎌倉將軍惟康親王、

其の癡癡せんことを恐れて、其の外面を包んである覆堂を建てられたので、今に至るまで、これを保存することを得たのである。芭蕉翁が、

五月雨のふりのこしてや光堂。

の句がある。

色かへぬ松のあるじや武藏坊。

とは、素烏が、中尊寺の辨慶松の句である。(上野より二百四十四哩)

○高館

芭蕉翁奥の細道に、三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は、一里こなたにあり。秀衡が跡は、田野になりて、金雞山のみ、形を殘



奥羽地方

三五二

す。先づ高館に登れば、北上川、南部より流るゝ大川なり云々とあ  
る所にして、一に判官館とも云ふ。義經の舊趾である。(同上)

○浅蟲温泉

陸奥の浅蟲にある温泉にして、國道の傍にある。東南西の三面は、  
山を負ひ、北は、海岸に臨み、風光絶佳、浴客、常に絶ゆることは  
ない。陸奥國中にありて、最も温暖の地であるから、避寒地として  
は、好適である。  
(上野より四百四十七哩)

○十和田湖

青森縣三戸郡の西南隅にありて、東西四里、南北四里餘、周回殆  
ど十六里、高山巍雅として其の四邊を包擁し、湖水清澄にして、鏡

のごとく、且つ多く鱒を産する。湖は東隅に至つて窄まり、奔湍溢  
出して、一大瀑布を懸けてある。其の附近には、奇岩落々として散  
在し、晩秋錦を晒すの候に至れば、紅葉は、水に映じて、水燃えん  
とするがごとく、風光清絶、人寰を絶つの趣がある。此に至るには、  
東北線の尻内驛よりするか、奥羽線の碓ヶ關よりするが順序である  
が、いづれからするも、十餘里はある。

(上野より尻内へ三百九十七哩、碓ヶ關へ福島を経て三百三十四哩)

○雄鹿半島

雄鹿半島は、古來名勝の地として、舊跡も少くない。此の地の風  
光は、海の美に依る奇岸の蒼布羅列して、其の興趣を添ふることの

浅蟲温泉 十和田湖 雄鹿半島

三五三



北陸地方

三五四

頗る大なるもので、奥の松島に譲らぬ景致である。種々の奇巖は、とても一々名状すべからざる趣を備へて、筆舌の其の萬一を記すこと能はず。書くこと能はざるところである。芭蕉が、松島は、笑ふがごとく、象潟は、怨むがごとくといつてあるが、雄鹿は、怒るが如くであると云ふべきか。秋田驛から行くが良からう。

(上野より福島を経て、三百五十四哩)

一一 北陸地方

○米山

越後鉢崎の東にある、米山に薬師堂がある。四月と十月の各八日の

祭日には、賽客四方より群集し來たりて、麿至雑踏殆ど名状すべからざる趣がある。北越線中、青梅川驛からこの鉢崎驛に至るの間は、極めて險難の所であるから八ヶ所の隧道がありて、出で、は潜り、潜りては出で、其の出入ごとに、風景の變るありて、汽車をして、今少しく遅緩ならしめんには、緩々賞すべきものをとて、却て汽車の早さを憾むの感が起る。

(上野より百三十一哩)

○魚津油田

能代川の西岸に位し、北は新潟市、南は、村松町、東は水原、新發田町に通じ、交通至便の地である。此の地、もと火井といへるものありて、越後七奇の一に數へられたが、科學の進歩するに従ひ、こ

米山 魚津油田

三五五



れを汲み取りて、精製するの法を渴究し、終に完全なる石油を産出するに至り、近年は、大に發達して、海外に輸出するに至つた。

(上野より新津へ二百五十六哩)

○順徳天皇の御陵

むかし承久の亂に、逆臣北條義時のために遷幸を強いられて崩御あらせられたる順徳天皇の御陵は、佐渡眞野村にある。此處は元來此の御陵は、天皇を火葬し奉りたる遺跡にして、其の御骨は、京都大原法華堂の御陵に埋葬し奉りたるものである。延寶七年、此の地の遺跡の埋没したるを探查して、修補を加へ、封境を限りて、爾來御陵廟として保護せらるゝに至つたのである。芥川喚の詩に、

自浪春波擁碧空。一塊孤島大洋間。周王飛昔日蜂後。

翠輦巡遊不復還。

とある。

○彌彦神社

越後西蒲原郡彌彦山の巔に祭つてある。崇神天皇の御宇、勅して創建せしめられたもので、今は國幣中社である。祭神天香具話小命は、天照大神の曾孫で、神武天皇の朝、此の山に降臨したまひ、賊を征服して、國民を綏撫し、田野を拓きて、農桑の業を教へたまひ、其の餘烈、數世の久しきに及んだ。境内一萬五千坪、山頂奥の宮の所在に至るときは、眼界忽ち開けて、北には佐渡が島を望み、陸羽



北 陸 地 方

三五八

の連山、糶糊の間に眺むべく、水天髣髴、日本海の一碧は、際涯なく、實に好風光のところである。萬葉集に、

伊夜彦のおのれ神佐備青彦の、

たなびく日すら小雨をぼふる。

とある。東京よりするには、柏崎にて轉乗せば、二時間ばかりにして、其の麓に達せられる。(上野より柏崎まで百四十哩弱)

○賤が嶽

賤が岳は、余吾の湖の西にある小山で、山麓より十二三町で頂上に達することが出来る。天正十一年四月、豊臣秀吉が、柴田勝家の先鋒、佐久間盛政を一擧に討伐したる舊跡で、世に著はれたる賤が岳

七槍の古戰場とは、此處である。成島弘の詩に、

岳頂猶見雲陣遮。北兵曾此列長蛇。猴郎畢竟非人力。

容易揮才戮夜叉。

とある。

(新橋より二百九十九哩、米原より十三哩)

○氣比の松原

昔、氣比神宮の新領地にして、敦賀市街の西にある。白沙青壯、長汀に連り、風色明媚、來り遊ぶものが多い。松林の中に水戸の志士、武田耕雲齋以下同志の墓がある。又其の東に當りて、官幣大社氣比神宮がある。御合津大神、仲哀天皇、神功皇后を祭つてある。境内殆ど一萬坪、本殿、總社、繪馬堂、拜殿、平殿、西殿、東殿及び多

賤が嶽 氣比の松原

三五九



北陸地方

くの攝社、末社がある。

けびの海の庭よくあらしかり菰の、

みだれいつ見ゆあまのつり船。

とは、柿本人麻呂の詠である。

(新橋より三百十五哩)

○金が崎神社

敦賀市街の北、金が崎に鎮座せるが、尊良、恒良の兩親王を祀つてある。此の地は、元弘の役、新田義顯の據守したるところで、金が崎の海に突き出でたる岬角の上に宮居がある。官幣中社にして、其の附近に古城址となる。境内には北海を望めば、風光の最も勝れたるが見える。

○足羽山

福井市街の南端に突起したる高涼である。石場、清水の兩所より登ることを得べく、石階層々、其の兩側には、酒樓軒を並べ、稍大厦もある。石の鳥居を借りて、なほ登るときは、足羽神社がある。鳥居を見て、ますく登るときは、山腹に一の平地がある。これを茶臼山となへる。これより坂路を斜に下つて行けば、正面に當りて招魂社がある。山麓よりこゝまでは、僅に六町である。後に山を負ひ、前は、山下の田圃を瞰望し、眺望の快豁なること、喩ふるに物かなからう。これより少しく南に降るときは、山崖峭立、此に明神堂を建てゝある。

(新橋より福井へ三百五十三哩)

金が崎神社 足羽山



北陸地方

御めぐみの深き足羽の神なれば、

振る鈴の音やいやまさりけり。

足羽山の半腹に繼體天皇を祭つてある足羽神社がある。老樹繁茂し、櫻、楓を栽ゑられたれば、春花秋葉二つながら佳といふのみならず、地は、高處にありて、眺望に富んで居る。

○鹿島

大聖寺町より大聖寺川を下るときは、西の方、一里半ばかりの處にある。此の處を鹽見堀切灣と云ふのである。川は、越前の北方の湖水と相合して、北海に注ぐので、其の灣頭には、奇岸究元として千態萬狀、實に奇觀、極めてある。鹿島は、即ち湖川の相合するところ

ろで、斷崖峭立、老樹鬱葱、江を隔て、之れを望んだならば、其の風光の美、得て言ふべからざる趣がある。夏時は、此に舟遊を試むるものが多い。

(新橋より大聖寺へ三百七十三哩)

○山代温泉

大聖寺驛の東南、一里十町の所にある。若し金澤地方よりせば、動橋驛にて下車せば、一里にして達することが出来る。神龜二年、僧行基の發見したるもので、南には鞍掛山の餘脈を負ひ、北は、田圃に連り、眺望の佳なるところである。温泉は、薬師山の麓から湧出するものにして、伏樋を以て總湯に導いてある。温泉は、華氏百六十五度で、鹽類泉である。此地、越中谷に九谷焼の竈元がある。(同上)



○山中温泉

前記の山代温泉より西南一里十町ばかりの所にある。大聖寺町からは二里半である。大聖寺川の岸より湧出するもので。泉質は、鹽類泉で、温度は、百十八度を保つて居る。一個の浴槽を町の中央に設け、之れを總湯となへて居たが、近年更に其の側に一つの浴室を設けて、高等の浴場としてある。此の地は、三面に山を負ひ、大聖寺川は、其の東邊を串流し、奔端激して玉を碎き、雪を飛ばすの観がある。兩岸は、斷崖絶壁、岸下には、奇岩の突兀たるものがある。一橋を架して、蟋蟀橋となへる。橋上の景致は、幽靜にして一顧の價がある。大聖寺からは、鐵道馬車の便がある。(同上)

○那谷寺

動橋驛にありて、南の方一里。眞言宗の古刹にして、境内の勝景を以て、夙に世に聞えて居る。元正天皇の養老元年、泰澄國師の草創したるもので、寺門の左側には、法堂や方丈がある。一條の石路、深樹の間を貫いて、長く通つてゐる。いよ／＼深く進むときは、山峯みな奇岩から成立つて、千差萬別の状態は、殆ど名狀すべからざるものがある。石階を登るときは、山腹には、巖の觀音がある。半は、懸崖に築いてある五間四方の堂守である。此の山中は、老楓が多いので、秋錦を晒すのときに至つては、騷客のこゝに集い來るものが多い。

(新橋より三百七十七哩)



○片山津温泉

動橋驛から東北一里弱の地にある。鹽類泉にして六十一度の温度を保つて居る。無色透明、無臭で僅に鹹味を帯びて居る。後には、丘陵を負ひ、前は、柴山瀉の湖に臨み、風光明媚の所である。(同上)

○金澤兼六公園

水戸の階樂園、岡山の後樂園と、もに、日本三公園の内に數へられたる公園で、百間堀を隔て、金澤城の東南に隣つて居る。廣袤二萬三千五百餘坪、丘陵の起伏して延延とするところ、綠樹蒼鬱、景致の幽邃なるところ、得て言ふべからざるの觀がある。園の西北なる表坂より入るときは、北に夕顔亭がある。蓮池に臨め

る一の亭樹で、小堀遠州の意匠に成れりといへる茶室様の家がある。其の前より茶室の小島に通ずる石橋を日暮し橋と云ふ。夕顔亭の東北には、白龍湍と云ふがある。其の溪間に、一枚石の橋が架してある。これを黄門橋と名づけてある。此の邊の風光は、深山幽谷に入りたるの心地がする。黄門橋の東にある一小丘を蝶螺山と云ふ。其の形は、蝶螺を伏せたるがごとくで、此の名がある。山を下りて、其の西に出づるときは、霞が池と云ふのがある。周回二百間ばかり、地中にある島を蓬萊島と云ひこれへ一橋を架してある。其の東、雪見橋の上に、福壽山と云ふがある。こゝに登るときは、金澤市の全體を望むことが出来る。



北陸地方

三六八

園内第一の眺望である。明治記念碑は、東坂の上にある。成巽閣は、もと文武の二校で、其の庭園は、頗る意匠を凝らし、雅致に富んで居る。園の東隅に紅葉山と云へるがありて、周回三町、高さ五六間の小丘であるが、全山楓樹生茂り、晩秋の眺は、得も言はれぬ。其の山腹に建てる五層の塔は、御室御所にあつたものを移したと云ひ傳へる。

紅葉山の西北には、鶴嶋島と云ふがありて、清流は、これを環流し、陰陽石、連理の松がある。その他、園内の名勝は、擧げて數へられぬ。

花の雲成巽閣や湧き出でぬ。

明治記念碑の詩に、

詩篇歴々美往芳。相見當年血戰場。義氣凜然凝不散。

紀功標畔月如霜。

とは大谷光尊の詠である。

(新橋より四百餘哩)

○猿丸神社

金澤市の南十餘町、崎浦村大字笠舞にある。地は、丘上にして、老樹鬱葱、犀川の清流に臨み、其の近傍には、水田相連つて、初夏の候、飛螢の群り出づれば、こゝに來たり遊ぶものが少くない。

(同上)

○和倉温泉

猿丸神社 和倉温泉

三六九



能登七尾町の西北二里十五町、和倉にある。東北は、海に面し、西南に山を負ひ、温泉は、海岸より湧出し、温度百八十度、鹽類泉にして無色透明、少しく苦鹹を帯びて居る。地は、屏風崎に接し、島嶼點々、海中に羅列し、矚目快豁、保養の好適地である。(津幡より七尾鐵道に轉せば三十三哩)

○高岡公園

地は、高岡市の東隅なる舊城址を以て、之れに充つるもので、地は、一帯の高陵となり、老杉古松老茂り、細流其の間を貫流し、風致頗る古雅である。西南馬場といへるところは、小堤櫻樹を載せて、長く兩側に連り、春陽駘蕩の候、此に來たり遊ぶものが、極めて多い

公園の中央に射永神社がある。社殿の結構壯麗ではないが、清洒にして高潔、小松原の秋草、立山の晴雪、古城地の水鳥、射水港の連帆、社頭の松風、高岡の炊煙、公園の盛花、二上の朝霞、深田の採苗、中川の吐月は、園内の十勝として、撰ばれてある。

(新橋より四百三十六哩)

越中伏木町の西、二上、守山、宮田、太田の四ヶ村に跨りて、古より月と紅葉の名所となつて居る。其の頂上よりは、遠く雲波の中に糲糊として、佐渡が島を望むことを得べく、新湊、伏木の市街は、脚下に集りて、眺望絶佳の地である。大伴家持の詠に、  
ますか いみ二神山にこのくれの、



北陸地方

しげき谷<sup>た</sup>べを朝<sup>あさ</sup>とひわたる。

(高岡より中越線にて四哩餘)

とある。

三七二

現代紀行文(終)

大正二年十二月一日印  
大正二年十二月七日發行

定價金五拾錢

不許  
著作權所有  
複製

著者 小林 鷺里  
發行者 小川 寅松  
印刷者 金子 久太郎  
印刷所 三協印刷株式會社

發行所

東京市京橋區  
南紺屋町十八番地

尚榮堂書店

電話京橋二六三九番  
振替東京四〇二二番



